





合計	其他	改T 改M 型	改T 改L 型	T S M L	T S M L	建 續 行	油 槽 船
		( 二 八 〇 〇 )	( 〇 〇 〇 〇 )	( 一 〇 〇 〇 )	( 五 〇 〇 〇 )		

五	三	五	二	四	二	〇
四	九	五	五	五	五	〇
隻	隻	隻	隻	隻	隻	隻
三						
〇	四	一	三	三	三	二
八	九	四	〇	四	〇	五
三	三	〇	〇	〇	〇	九
九	一	〇	〇	四	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
總						
屯						

三五八

西



極秘

三  
航  
空  
輸  
送

三  
五  
二

川  
淵  
研  
究  
所

七  
五

C



(五) 運輸(航空輸送)

三二二  
川淵研究社

帝國民間航空概観

帝國航空輸送事業ハ昭和三年政府補助ノ下ニ國策會社トシテ  
日本航空輸送株式會社成立ラ見、同年四月一日ヲ以テ東京  
大阪間其他ニ定期旅客郵便輸送業務開始セラレタルヲ嚆矢トス。  
爾來其發達ハ諸列國ニ比シテ進マリシモ昭和十二年支那  
事業發効弁スルヤ陸海軍機ハ活躍ニ利戟セラルト共ニ事業變遷  
言レ東亞ノ新事業能ハ即應ニ併テ世界ノ狀勢カニ對應セニカタクモ從來  
航空輸送事業ハ根本的ニ檢討ノ必要ヲ生ジ昭和十三年ニ至リ日  
本航空輸送株式會社ト國際航空株式會社ヲ融合一元化シテ事業  
ノ基礎ヲ一層鞏固ナラシムベク新大日本航空株式會社成立ラ見ルニ  
至レリ(第一表參照)

カクシテ從來、主トシテ國內ノ航空輸送ニ踴躍シ居リタル毅ヲ脱シ日  
滿支ヲ通スル航空ノ紐帶ハ強固ニ結バレルト共ニ更ニ國際航空路並ニ  
南洋委任統治領土ノ海洋航空ヲ進出シ大東亞戰爭ノ勃發  
前ハ東亞ニ於テ英、蘭、トノ航空ノ單霸戰ニ堂々挑戰シアリヤウヤク  
其躍進目覚ヒキモナルニ至レリ。

2. 昭和十三年以降ニ於ケル帝國ノ航空狀況



斯ノ如ク支那事變勃發前、我民間航空事業ハ到底諸列國ニ伍シ得ザリトモ事變ヲ切不機トシテ航空機ノ眞價ハ朝野ノ認識セラレ所ナリ一カニ於テハ飛行機乗員ノ急速養成ノタメ航空局ハ極力強化セラレ從來永ク主トシテ民間飛行學校ニシテ依存カラレタル民間航空教育ハ總テ官立航空乗員養成所ニ移管セラレヌ地ヲ民間航空工業業ニ就テモ外國依存ノ域ヲ脱シ漸次飛行機發動機製造工業業ノ獨立ヲ見ルニ至リタルトニ依リ航空輸送モ亦着々躍進ノ一途ヲ辿リ(第一表、第二表、第三表、第四表参照)

齊シトシテ航空ニ対スル決心ハ支那事變後ト雖モ未ダ頗ル低調ニシテ軍事的ニ免テ政治的ニモ經濟的ニモ航空ハ交通一少部外ニ過ギズト爲シ、交通政策上輸送力ハ海運陸運ト比較シテ極メテ貧弱ナル矣ラミ目下敵國ノ航空ヲ持ツ真ク意義ヲ認識スル者ハ極メテ寡クタル状態ナリ

然ルニ此ノ時既ニ諸列國ハ着々航空ノ重要性ニ留意シ民間飛行機及乗員ノ養成ヲ振元ノタメ全カラ之ニ傾注シ居リ是ハ直ニ戰時ニ於テ大ナル役割ヲ持ツニ至リ戰時ニ於テハ航空機動員ノ温床トシテ民間航空ノ重要性ハ益々痛感セラレニ至リタリ(第五表参照)

### 3. 帝國航空輸送ノ現況

航空カカトトテ作用スル場合ハ第一ニ空軍ノカトトテ第二ニ空軍力ノ基底タル民間航空ヲ俟タズシテ完壁タリ得ヤルハ言フ俟タザル處



ナレド同時ニ逆ニ空軍カハ強カニ民間航空ヲ推進シ、コノ兩者ノ  
密接不可分ナル相對的関係カ一國ノ航空カハ發展ヲ推未スト謂  
コト得ベシ。

以ノ觀英ヨリ帝國ノ民間航空ハ夫邦事ヲ以テ遂次整備セラレタルモ  
亦也其ノ途ニ於テ大東亞戰事ニ突入セルヲ以テ現狀ハ未ダ極メテ  
不況カニシテ大東亞航空輸送ノタメニ各省乘員器材共推躍的ニ増  
強ニ要アリ。

現在我民間航空ハ大東亞戰爭開始直前ヨリ引續キ專ラ陸  
軍ニ付定期、海軍ニ付定期トシテ陸海軍ノ作戰目的ニ即  
應スル輸送ニシテ從事スル一般營業用定期航空ハ中止セラレ  
ル莫儀ニシテ存戰進展ト現在ノ人負器材ヲ以テテハ告當カ一般民  
間人ノ利用ハ期待シ得ザルベシ。

併シ乘員ト飛行機生産ノ状況ニヨリカル状況ハ遂次解消セラレ皆  
業展期航空ノ復活ハ遂次實現セラレシヨリ示六表参照ス

#### 4. 大東亞航空圈確立

現在我カ國輸送機ハ殆ド大型機ニシテ時速三〇〇軒内外航續時  
間概シ十時間ニ達セルヲ以テ東京ヲ中心トシテ約三千軒ノ半徑ヲ持  
ツ内ハ完全ニ帝國航空圈内ニ在リ。然シホラ飛行機ノ時速ト大  
型化ハ此ノ半徑ヲ更ニ四千軒五千軒六千軒ニ迄延長スルニ人強チ  
造キ將ホニ非ルベシ。然ラバ東京ヲ中心トシテ飛行機ノ日行程六千軒  
ノ内内ニ合マレ地域即チ北ハ「マリーチヤ」ヨリ東ハ「ハワイ」ニ及ビカントシ  
「マリーカ」トシテ「濠洲」北端ヲ通り「シマラ」馬末「ボルネ」印度ノ東部ヲ  
七八



經于「更ニパキール」ノ頂ヲ起テ、東部トレキスタン以東ニ至ル迄大ナル大東亞地域  
ヲ包含スルコトナリ之ヲ「大東亞航空圈」トシテ政治的ニ經濟的ニ東ニ示ラ  
甲ベトスル見等ノ航空圈内ノ諸國家諸民族ヲ糾合シテ大東亞共栄圈  
建設ニ邁進セシムルニトハ今後内航空ニ力ヲシタル大使命一タルベシ  
大東亞戰爭ノ現段階ニ於テ重要ナル輸送ノ爲ニ船舶ノ急速下  
ル振立ハ焦眉ノ急タルト同時ニ人ノ輸送ノタメニ飛行機ノ急躍的  
増強ハ刻々ノ急務ナリ。即從來ノ輸送ヲ船舶ニ依存シ居リタル  
状態ヲ急遽ニ飛行機ニ轉換シ以テ大東亞共栄圈ノ隅々ニ至ル占領  
ニ人ヲ輸送スルニトシヨリ大東亞ノ盟主タル日本ト直接ニ然カモ、急速ニ結合  
マシメ、帝國ヲ甲ベトスル政治的統一ヲ期スベキナリ。



第一表

昭和十三年 不列國民間航空状況勢比較表

國別	定期航運哩	輸送客數	輸送郵便屯數	輸送貨物屯數
米	二六〇、四九五 七一、一九九	八六〇、七六一 三六九、五四二	六一五 二	四二四、六一〇 二〇一
英	七二、一五九 一、二五九	一三〇、〇〇〇 二〇、〇〇〇	一、七五四 三	一、八二九 七
獨	二九、〇六四 二、二五九	二二、〇〇〇 二、〇〇〇	三、四五四 三	一、五二七 八
佛	三二、七二九 二、九〇一	一七、八〇五 一、〇五二	一、四八四 四	二、五二六 四
和	一、〇八九 五、八〇八	一、六四一 七、九〇三	八、四八六 五	三、〇三〇 四
伊	一一、三八四 三、八四三	一、五三六 七、九三三	二、四八六 三	八、四〇一 〇
日	八四、七九四 六、八四四	一、五七三 六、六一一	一、四九三 六	二、七六〇 〇



第二表

定期航空輸送統計(一)

年度	航空回数	旅客		貨物		郵便物	
		總數	人	總數	kg	總數	kg
昭和二十一年	五、六七二	一七、八四一	五、一八四	六、三九四	三、三三七	三、五八四	二、四四一
二十二年	八、七四六	二九、六四五	四、四一四	二〇、八四五	一、九〇三	四、一五九	三、三九九
二十三年	一〇、四五二	五二、六六六	三、〇〇九	二七、六一七	一、三三三	六、四三九	三、五九九
二十四年	一〇、二七二	七〇、〇五五	四、〇三九	三三、六四九	三、三〇四	一、〇六〇	六、五六一
二十五年	一〇、八〇一	六七、三一九	四、三三三	五、六七七	三、八七一	一、四三三	九、〇八五
昭和二十六年	六、七九一	四〇、七三四	四、三三三	四、五七三	三、八七一	六、三五二	九、〇八五

三三二



第三表

定期航空輸送統計(一)

年	度	飛行時間	飛行距離
昭和二年	一	三一,九三二時 五九分	六五,四七九 九四四 新
昭和三年	一	三八,三四一 一四六	八八,四五六 九四
昭和四年	一	四三,八四六 二二	九九,三三九 三二
昭和五年	一	三八,八〇一 一四三	九五,四四六 四四
昭和六年	一	四三,一〇四 二三	一〇,一九八 三七六
昭和七年	一	四六,六〇六 〇六	一三,五五六 五六六

備考

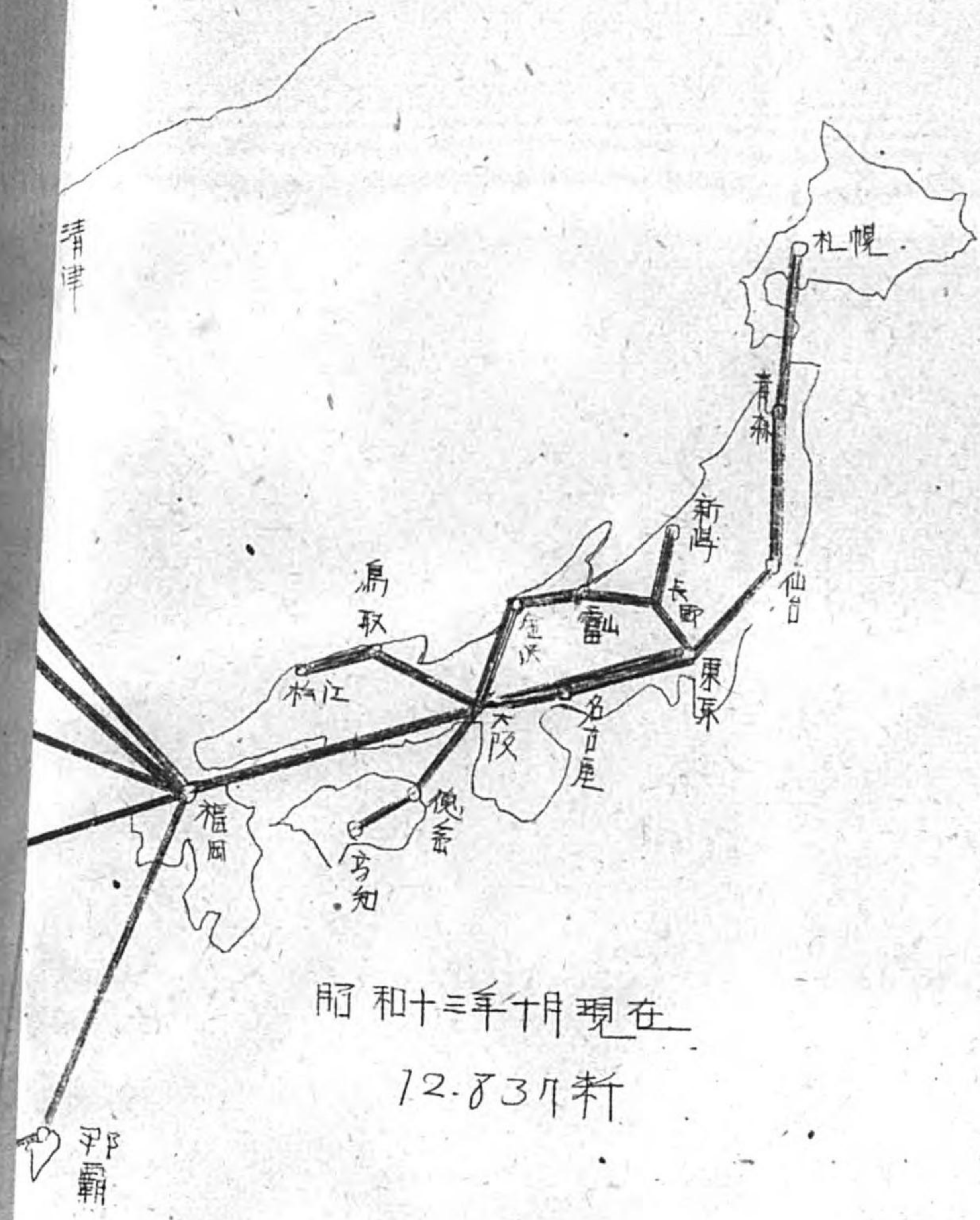
一 昭和七年 一三六〇時 二二分  
二 地球一周距離八 四〇〇二五科

二 二七四六四〇



第四表 (一)

航空路ノ変遷



昭和十三年十月現在  
12.834新

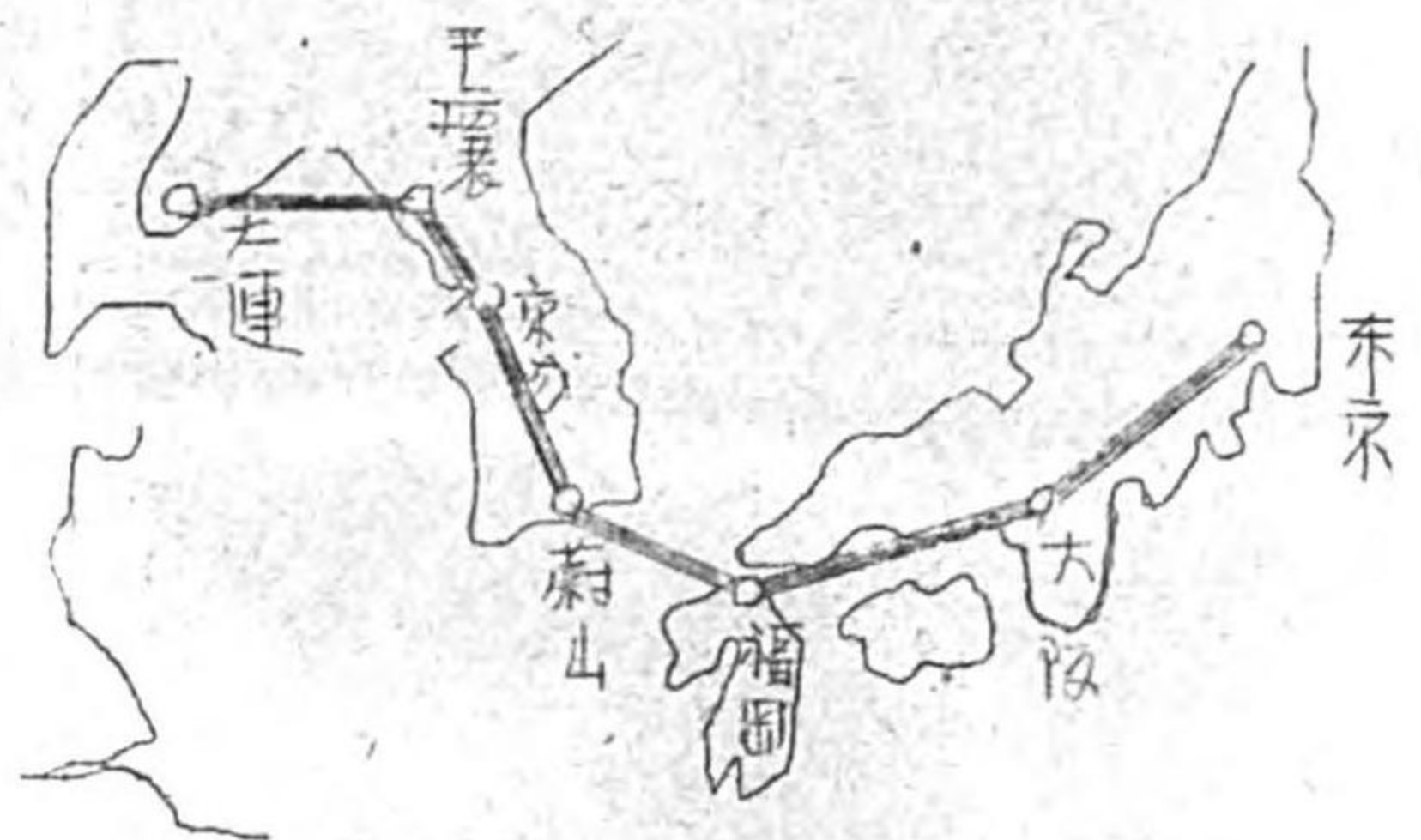












昭和四年九月現在  
 2,575 軒

田



第五表

一九三八年 = 六ヶル列國飛行距離比較表

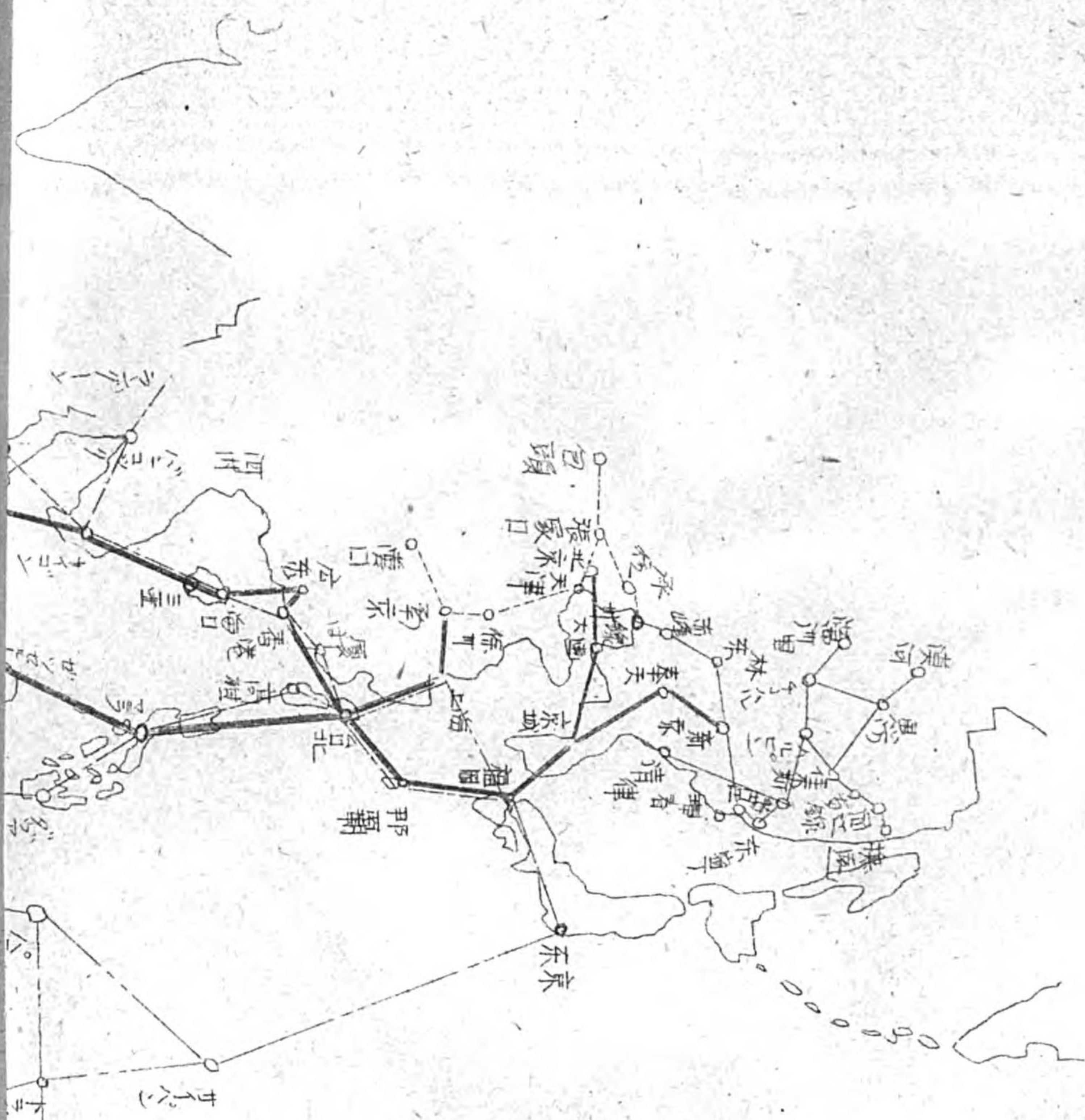
國	飛行距離	比較	一九四〇年	一九三八年
米	一九、六九三、〇〇三 航	一四、六六	一九四〇年 一九、三三六、六三 航	一九三八年 一九、〇〇〇
英	二、九二九、六〇〇	二、五九		
獨	一、八八三、七九〇	二、一一		
佛	一、四四八、四二九 航	一、六三		
伊	一、三五二、四五四 航	一、五三		
日	八、八四五、八九四	一、〇〇	一九四〇年 九、五四四、六四四	一九三八年 八、〇〇〇



第六表

航空線路圖

昭和十六年四月現在



○ 航空線路



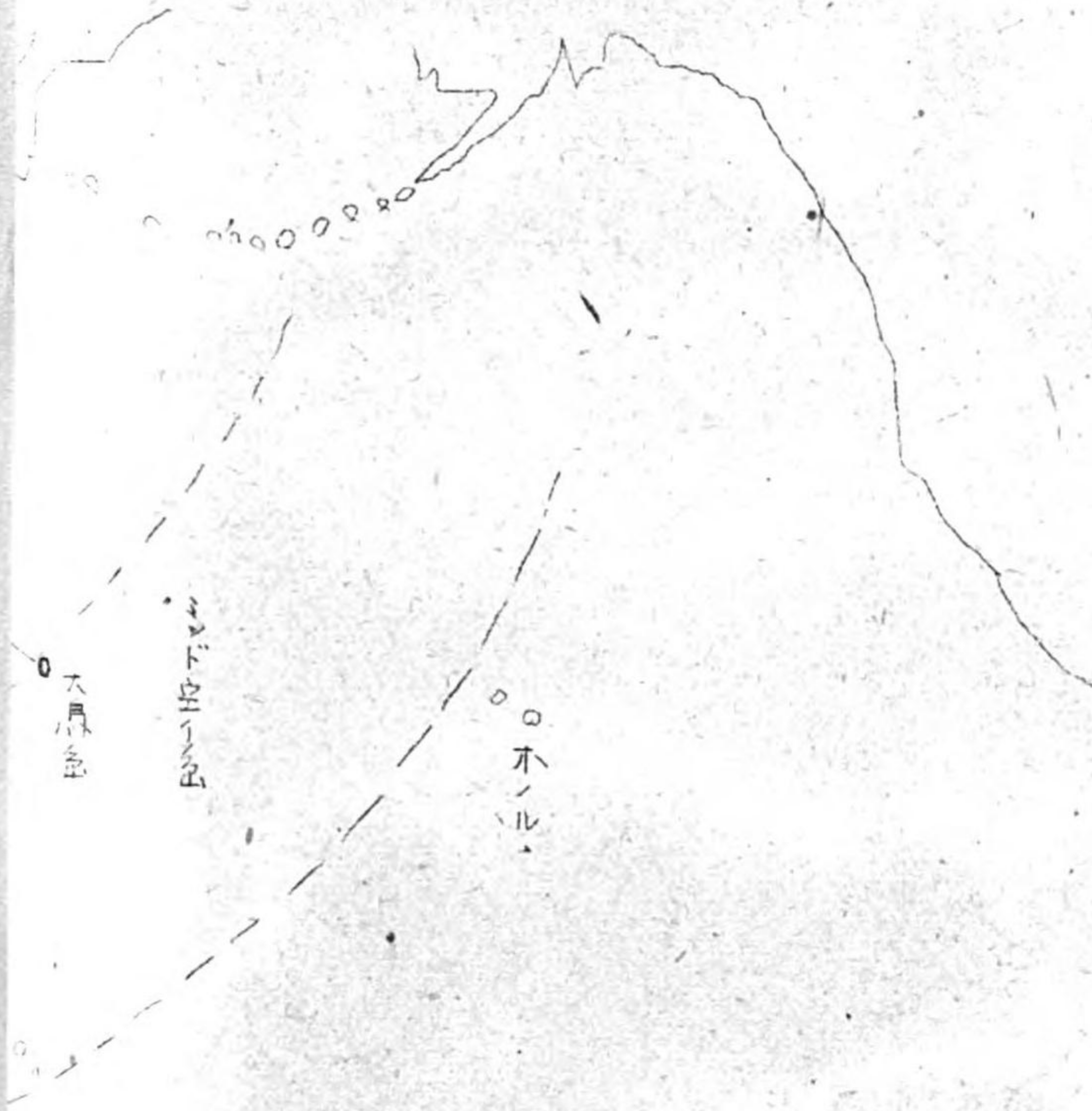
海軍機密陸上  
海上  
陸軍専用  
滿洲航空  
中華航空



17



第七表



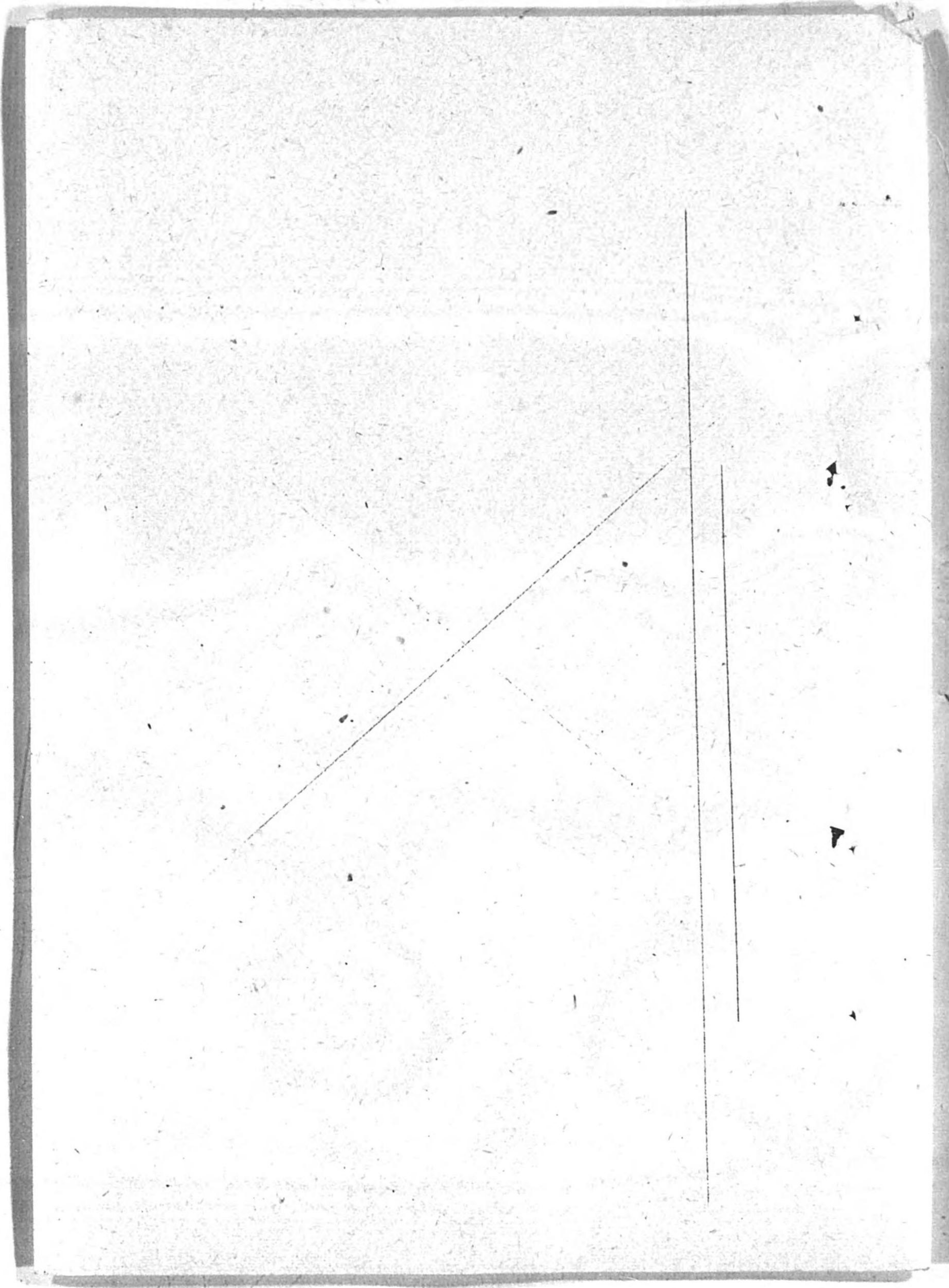
三  
五  
二







44



ac



極秘

經濟

(六) 電力

一 電力需給 / 推移  
二 今後ニ於テル 電力拡充対策

今井 研究  
老田 研究  
生



一、電力需給の推移

今井研生

(一) 電力増充の実績

最近ニ於ケル電力増充ハ建設用資材ノ逼迫及労務ノ不足ノ滑多ク著シクソノ進歩ヲ阻害サレ、殊ニ昭和十六年以降ニ於テソノ傾向顯著ナリ。(第一表、第二表参照)

(二) 発電量ノ実績

発電量ハ昭和十三年迄順調ナル増加ヲ見タルモ十四年度以降著シク鈍化シ、昭和十七年度ニ於テハ遂ニ其年度ニ比シ減少ノヲ来シ生産増進阻害ノ一大要因ヲ構成セリ。之ハ異米渴水、煤炭不足及炭賃低下ニ依ル発電力ノ減退ニ原因ス。(第三表参照)

(三) 電力消費概況

右ノ如キ電力不足ニ對処シ重工業ニ對スル電力ノ供給ヲ確保スルヲ以テ昭和十四年度電力調整令ヲ制定シ電力ノ消費規正ヲ実施セリ。電力消費規正ノ経過及昭和十七年度ニ於ケル之ノ実施状況ハ第四表、第五表、通

(四) 豊水期電力利用

昭和十六年度ヨリ豊水期ニ於ケル電力利用強化期間ノ設定アリ爾来豊水期ニ於ケル特殊電力ノ利用ニ努メ、其ノ中昭和十七年十二月、豊水期電力利用強化計画実施要綱ノ決定



予見、所設勞務僅少ニシテ大電力ヲ消費シ豊水期間ニ  
 生産集中ヲ能ハルミ硫酸特殊鋼フ否アロイ等ニ防産  
 業ノ生産ヲ特ニ深夜間電力ノ利用ヲ目途トシテ計画約ニ  
 増強スルマトナレリ、昭和十八年度豊水期(四月一日ヨリ三月三十一日)ニ  
 於ケル之ガ実施目標ハ約三億 kWhニシテ実績ハ約一億五千 kWhナリ  
 (五)電力需要ノ現況  
 (一)電力需要ノ測定ハ困難ナルモ昭和十五年ヨリ十七年ニ至ル間假  
 ニ消費規程ヲ行ハザリシモノト假定セル場合ノ需要ト供給ノ比較  
 ハ左記ノ通りナリ

昭和十五年	供給力	制限ナカリシトキノ 電力々力	不足
十六年	四、五三〇	四、八〇五	二七五
十七年	四、七六〇	五、一四五	三八五
十八年	五、〇七〇	五、四九五	四二五

(2) 昭和十八年度下期ニ於ケル新規電力需要ハ約五三万 kWhニ対  
 シ供給力ハ約三二万 kWhニシテ供給ハ需要半バニ達セズ而モコノ供  
 給力ハ昨年度ハ如キ渴水ヲ来ス場合或ハ石炭ノ入手不円滑  
 ナル場合ハ更ニ低下スル可能性アリ(別表ハ参照)

(六) 滿洲朝鮮台湾ニ於ケル電力需要状況  
 滿洲ハ対独榮註機器ノ入手ニ得タルト、産業計画特ニ人造石  
 油ノ業ノ進捗予定ノ如クナラザリト為中滿地方ニ相當ノ電力



(七) 大東亞電力問題

大東亞電力問題

電力ト工業立地

参考

一 我が国ノ電力ノ特徴

二 電力生産ノ特性

三 建設ノ長期性

四 負荷曲線(別表十) 参照

本誌ヲ生ガズキ見込。南滿地区ニ於テハ水豊登電所トノ關係ニ於テ火力ニ若干ノ余裕生ズル見込ナリ。朝鮮ハ建設資材ノ制約ヨリ若干ノ遅延ハ免カレザルモ産業建設計畫ノ遅延ハ産業再編成ノ動向等ヲ綜合勘案スルトキハ大体ニ於テ需給ノ内衡ヲ保テ得ル見込ナリ。(別表九参照)

台湾ニ於ケル電力需要ハ近年増加ノ一途ヲ辿リ概テ現存設備ノ能力ノ最大限ニ達スルニ至レリ。從テ海軍工場及イソオクタン生産工場ノ新設ノ進捗ニ伴ヒ今後ハ電力ノ劃期的需要増加ヲ来シ目下策定シテアル電力補充計畫ハ資材ノ關係ニ依リ月滑ニ進捗セサルトキハ一九四九年四月以降電力ノ需給ハ相當逼迫スルモノト予想セラル。(別表十参照)

大東亞ノ電力資源

電力ト工業立地

参考

一 我が国ノ電力ノ特徴

二 電力生産ノ特性

三 建設ノ長期性

四 負荷曲線(別表十) 参照



年次	最大発電設備	内		外		計
		水力	火力	水力	火力	
七年末	四、三〇六、〇〇〇	二、九八四、〇〇〇	一、三三二、〇〇〇	八三、〇〇〇	九六、〇〇〇	一、七九、〇〇〇
八年	四、五二〇、〇〇〇	三、〇九、〇〇〇	一、四三三、〇〇〇	一〇五、〇〇〇	一三七、〇〇〇	二、一四、〇〇〇
九年	四、七三九、〇〇〇	三、一七一、〇〇〇	一、五六八、〇〇〇	八二、〇〇〇	一三六、〇〇〇	二、一九、〇〇〇
〇年	五、一三七、〇〇〇	三、三三九、〇〇〇	一、八二八、〇〇〇	一三八、〇〇〇	二六〇、〇〇〇	三、九八、〇〇〇
一年	五、七九四、〇〇〇	三、六三三、〇〇〇	二、一四三、〇〇〇	三三三、〇〇〇	三二四、〇〇〇	六、五七、〇〇〇
二年	六、一八三、〇〇〇	三、八五三、〇〇〇	二、三三一、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	一八九、〇〇〇	三、八九、〇〇〇
三年	六、六二〇、〇〇〇	四、一六六、〇〇〇	二、四五四、〇〇〇	三二四、〇〇〇	一八三、〇〇〇	四、三七、〇〇〇
四年	七、二三〇、〇〇〇	四、五五五、〇〇〇	二、六九五、〇〇〇	三八九、〇〇〇	二四一、〇〇〇	六、三〇、〇〇〇
五年	七、八八二、〇〇〇	四、九九七、〇〇〇	二、八八五、〇〇〇	四四三、〇〇〇	一九〇、〇〇〇	六、三三、〇〇〇
六年	八、一九〇、〇〇〇	五、三三三、〇〇〇	二、九六八、〇〇〇	三二五、〇〇〇	八三、〇〇〇	三、〇八、〇〇〇
七年	八、四七六、〇〇〇	五、四六三、〇〇〇	三、〇一三、〇〇〇	二四〇、〇〇〇	四三、〇〇〇	三、八五、〇〇〇

第一表  
別表(一)

一、電気事業事業用

一、発電所出力核充実績

(単位、発電地、キロワット)

五、サイクル問題(別表(二)参照)

昭一八、四、一



二、自家用

年次	最大発電設備	水力	火力	水力	火力	計
七年末	六〇五、〇〇〇	一七二、〇〇〇	四七八、〇〇〇	六、〇〇〇	五、〇〇〇	四五、〇〇〇
八年	五三三、〇〇〇	七二、〇〇〇	四五〇、〇〇〇	五、〇〇〇	六、〇〇〇	八三、〇〇〇
九年	五七六、〇〇〇	七三、〇〇〇	五〇四、〇〇〇	一、〇〇〇	五、〇〇〇	五四、〇〇〇
一〇年	六二〇、〇〇〇	七三、〇〇〇	五四七、〇〇〇	二、〇〇〇	四、〇〇〇	四四、〇〇〇
一一年	七四九、〇〇〇	七五、〇〇〇	六七四、〇〇〇	三、〇〇〇	二、〇〇〇	二九、〇〇〇
一二年	七九四、〇〇〇	七二、〇〇〇	七三三、〇〇〇	三、〇〇〇	一、〇〇〇	四九、〇〇〇
一三年	九四〇、〇〇〇	七九、〇〇〇	八六一、〇〇〇	七、〇〇〇	一、〇〇〇	一四、〇〇〇
一四年	一、〇六四、〇〇〇	一一二、〇〇〇	九四三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一、〇〇〇	一四、〇〇〇
一五年	一、二〇五、〇〇〇	一三〇、〇〇〇	一、〇七五、〇〇〇	一八、〇〇〇	一、〇〇〇	一四、〇〇〇
一六年	一、二六八、〇〇〇	一四六、〇〇〇	一、一三三、〇〇〇	二七、〇〇〇	一、〇〇〇	六三、〇〇〇
一七年	一、三二七、〇〇〇	一七二、〇〇〇	一、一四五、〇〇〇	二六、〇〇〇	二、〇〇〇	四九、〇〇〇

昭和八年末、第八電気の業法ノ改訂ニ伴ヒ電氣事業業ニ電力供給スル自家用施設が電氣事業業(第三号ノ事業業)トナリタルニ因ル。

年内  
誤  
本年期ニ対スル増加







資材名	昭和十六年				昭和十七年			
	要求量	計量数量	配当実績B	B/A%	要求量	計量数量A	配当実績B	B/A%
普通鋼	一九七、三六四	九二、五八〇	八六、一二五	九三、一	二七、三四一	一〇六、〇四五	七〇、二〇二	六六
普通鋼	三〇、三九四	一〇、六二〇	〇、三五五	九七、五	一一、九五二	九、八三一	八八	
電氣鋼	三〇、二七四	六、二〇〇	六、八二五	九九、七	三、四七〇	二、八六九	八三	
鉛	四、七二五	一、六一八	一、六一八	一〇〇	一、七〇五	一、四二四	八三	
錫	五、〇三〇	一、七五四	一、六一七	九二、二	一、七六九	一、三二五	七四	
アール	七三三	一三、五九	一、二六四	九三、〇	一、五一	一、〇八	七二	
石綿(高)	二、三七〇	一、四〇三	一、〇八五	一〇、五、四	二、八一八	二、二九七	八二	
石綿(着)	二、六七	三〇	二、九一	九七、一	四〇	二、六	六五	
セメント	一〇六、四三七	七六、六五	七四、八	九七、七	五五、五	三五	六三	
	七二、〇九〇	五四、二、三七三	七五、七	九七、七	四三六、五六		七四	

三十一

七







年次	最大発電設備	渇水期供給力	各年十月需実績	備考
七年	四、三〇六、〇〇〇	三、一六七、〇〇〇	三、〇七三、〇〇〇	
八年	四、五二〇、〇〇〇	三、三三一、〇〇〇	三、三三四、〇〇〇	
九年	四、七五九、〇〇〇	三、四五五、〇〇〇	三、六四九、〇〇〇	
一〇年	五、一三七、〇〇〇	三、七六五、〇〇〇	三、九六〇、〇〇〇	
一一年	五、七九四、〇〇〇	四、二二九、〇〇〇	四、二八七、〇〇〇	
一二年	六、一八三、〇〇〇	四、五二二、〇〇〇	四、五三六、〇〇〇	
一三年	六、六二〇、〇〇〇	四、八一三、〇〇〇	五、〇三一、〇〇〇	
一四年	七、二五〇、〇〇〇	四、八〇二、〇〇〇	五、一三二、〇〇〇	
一五年	七、八八三、〇〇〇	五、〇五五、〇〇〇	五、三〇三、〇〇〇	
一六年	八、一九〇、〇〇〇	五、二六七、〇〇〇	五、五三三、〇〇〇	
一七年	八、四七六、〇〇〇	五、四七〇、〇〇〇	五、四九五、〇〇〇	

電力需給状況

(実績)  
單位発電地実

昭一八、四一  
キロワット)

三才イ



別表(四)

一般電気の管内規程の経過概要

年度	用途	地域	限
昭和十四年度	昭和十五年二月十日に施行す 用光四種需用以外、需用(乙=揚グルモ及電燈用ヲ除ク) 乙、イ、光一種需用 イ、光二種需用中=揚グルモ、金属鉍葉石油鉍葉、他九葉種	東北地方 南部 関東 地方 中部 地方 近畿 地方 中国 地方 中国 地方 中国 地方 中国 地方	百分、九十 百分、六十 百分、五十 百分、九十 百分、七十
	昭和十五年二月二十日に上記中地域及限度ヲ左、通改ヲ実施シテ 甲=属スルモ 乙=属スルモ	東北地方 南部 関東 地方 中部 地方 近畿 地方 中国 地方 中国 地方 中国 地方 中国 地方	甲=属スルモ 百分、八十五 百分、七十 百分、八十 百分、七十五
	昭和十五年三月十五日に上記中地域及限度ヲ左、通改ヲ実施シテ	関東 地方 中部 地方 近畿 地方	百分、八十五
昭和十五年年度	昭和十五年十一月十二日に施行す 第一種需用、第二種需用 甲類 第二種需用、第三種需用 乙類 イ、一種需用、イ、二種需用 甲類 イ、二種需用、イ、三種需用 乙類	東北地方 南部 関東 地方 中部 地方 近畿 地方 中国 地方 中国 地方 中国 地方 中国 地方	百分、百 百分、九十 百分、八十五 百分、八十五 百分、百 百分、八十五 百分、八十 百分、八十
	昭和十六年十二月一日に実施す イ、一種需用、イ、二種需用 甲類 イ、二種需用、イ、三種需用 乙類 イ、一種需用、イ、二種需用 甲類 イ、二種需用、イ、三種需用 乙類 イ、一種需用、イ、二種需用 甲類 イ、二種需用、イ、三種需用 乙類	東北地方 南部 関東 地方 中部 地方 近畿 地方 中国 地方 中国 地方 中国 地方 九州 地方	百分、百 百分、九十 百分、八十 百分、八十 百分、百 百分、八十 百分、七十 百分、七十 百分、百 百分、八十五 百分、七十五 百分、七十五
昭和十七年度	昭和十七年九月二十三日告示公布十月一日に実施す イ、一種需用 甲類 イ、二種需用 乙類 イ、三種需用	東北地方 地方 関東 地方 中部 地方 近畿 地方 中国 地方 中国 地方 中国 地方 九州 地方	百分、百 百分、八十 百分、七十 百分、七十
	昭和十八年一月二十七日改定二月一日に実施す イ、一種需用、イ、二種需用 甲類 イ、二種需用、イ、三種需用 乙類	同上	百分、九十 百分、七十 百分、五十 百分、五十



(10. 2. 0)

限 度	備 考
百分、九十五 百分、六十 百分、五十五 百分、九十 百分、七十五	限度、基準、八年同月(昭和十四年一月分)ノ使用電力量トス 昭和十五年二月十日ヨリ十日間最高四割乃至四割五分制限
甲=属スルモ、 百分、八十五 百分、七十 百分、八十 百分、七十五 乙=属スルモ、 百分、九十五 百分、七十五 百分、九十 百分、八十五	昭和十五年二月二十日ヨリ平均二割制限
百分、八十五 百分、九十	昭和十五年三月十五日ヨリ平均一割制限 同 三月二十二日制限解除
百分、百 百分、九十 百分、八十五 百分、八十五 百分、百 百分、八十五 百分、八十 百分、八十 百分、百 百分、八十 百分、七十 百分、七十 百分、百 百分、八十五 百分、七十五 百分、七十五	限度、基準、昭和十五年八月及九月ノ月平均使用電力量トス 昭和十六年三月五日解除
百分、百 百分、九十 百分、八十 百分、八十 百分、百 百分、八十 百分、七十 百分、七十 百分、百 百分、八十五 百分、七十五 百分、七十五	限度、基準、昭和十六年四月乃至六月ノ月平均消費電力量トス 昭和十六年十二月八日ヨリ二月十四日迄最高一割五分制限 昭和十七年三月十四日解除ト同時ニ休電日指定ニ関スル告示公布十五日ヨリ施行 月二日休電日指定
百分、百 百分、八十 百分、七十 百分、七十	昭和十七年八月十四日休電日追加指定ニ関スル告示公布同日ヨリ施行 第一種需用甲類 月二日 第二種需用乙類及第三種需用 月三日 限度、基準、昭和十七年四月乃至六月ノ消費電力量トス 基準電力量、変更ニ付テハ通告ヲ受テタル日ヨリ一月以内ニ限リ 逡信局長ニ申出ルニ付得ルモトセリ 昭和十七年十二月五日ヨリ最高二割五分制限 昭和十八年一月十六日ヨリ最高三割制限(四子ノミ)
百分、九十 百分、七十 百分、五十 百分、五十	

三六







六、四、一	六、三、二六	六、三、二二	六、三、二〇	六、三、一六	六、三、一	六、三、一	六、一、一九	
六、三、二六 二乙以下解除 生産率関係 六、三、二六	六、三、二二 二種、二甲臨時解除 二乙以下百分、百	六、三、二〇 二種甲百分、百 (隔週休電)	六、三、一六 二種甲百分、百	六、三、一 二種甲百分、百	六、三、一 二種甲百分、百	六、三、一 二種甲百分、百	六、一、一九 六、五、二	
全上	全上	全上	全上	東部 六、四、二 二種甲以上解除 二種乙以下百分、百	東部 六、五、二 中部 六、四、二 西部 六、二、二	東部 六、四、二 中部 六、四、二 西部 六、二、二	東部 六、四、二 中部 六、四、二 西部 六、二、二	中部 六、四、二 西部 六、二、二
全上	全上	全上	全上	新潟縣 二種甲百分、百	南部 六、五、二 北部 六、四、二	南部 六、四、二 北部 六、四、二	南部 六、四、二 北部 六、四、二	北部 六、四、二
全上	全上	全上	全上	二種、二甲臨時解除 二乙以下百分、百	第五報	二種甲 三〇% 其他 三三% (三日二回休電) 此ノ間降雨ノ毎 二大口需用ヲ五 段程度ニ緩和ス	二種甲 三〇% 其他 三三% (三日二回休電) 此ノ間降雨ノ毎 二大口需用ヲ五 段程度ニ緩和ス	
六、四、一	六、三、二六	六、三、二二	六、三、二〇	六、三、一六	六、三、一	六、三、一	六、一、一九	



割限段階表

一 種	二種 甲	二種 甲 口	二種 乙 及 三 種	平均制限率 (本州中央部)	
0	0	0	5	2	第一段
0	5	5	5	3	第二段
0	5	0	0	5	第三段
0	0	5	5	8	第四段
0	0	0	0	0	第五段
0	0	0	5	6	第六段

二電燈用電力

十七年十一月ヨリ  
十八年二月ヨリ

制限実施  
制限強化実施(但北海道八ヶ岳道)  
現在續行中



別表(六)

電力消費規正需用区分表

第一種需用

第二種需用

一、軍用  
二、其他通信大臣ノ指定シタルモノ

甲類

一、採鉄業

二、土砂採取業

三、金屬工業業

四、軍需品製造工業業

五、機械器具工業業

六、窯業

七、化学工業業

八、交通通信工業業

九、其他ノ公共事業

乙類

一、炭田甲類中一、二、三、六、七ニ掲ケルモノニテ甲類ニ属スルモノ以外ノモノ

二、製材業

三、農林業

四、水産業

五、倉庫業

六、食料品業

第一種、第二種、第四種需用及電燈用ヲ除ク其他ノ需用

一、照明

二、電熱及動力

電燈用

一部







地区	昭和十七年度増加供給力		昭和十七年度上期		昭和十七年度下期		申請電力	
	設備増加 依此新規並 ニ増加供 給力	動員供 給力	表現在 既ニ認 計タル電力	供給 余力 (A)	引當電力 ヲ要スルモノ (B)	引當電力 ヲ要セザ ルモノ	計	申請電力 (A+B) 余力
北海道	34,300	10,500	14,300	30,500	3,600	0	36,000	36,000
東北	33,200	1,500	23,900	30,500	33,930	16,630	50,560	33,900
本州中央部	25,600	235,200	325,593	158,527	100,320	49,410	249,720	330,840
中国	38,700	14,400	53,646	470	6,300	3,300	10,600	33,500
四国	33,800	3,100	30,350	5,560	11,800	0	11,800	16,000
九州	57,600	17,150	50,920	19,830	9,450	14,400	23,850	72,492
全国	435,200	60,400	500,709	220,891	166,400	83,740	250,140	533,336

一、数字ハ全部常時及補給電力ノミヲ示ス  
 二、右表中引當電力ヲ要セザルハ從來既認可電力ヲ超過受電シテ今期認可ノ際別段新規供給力ヲ要  
 情ニ依リテ得止受電シ居リタルモノ等ニシテ今期認可ノ際別段新規供給力ヲ要  
 七、サルモノナリ。  
 三、動員供給力トハ昭和十八年度電力動員計馬選定ノ際考慮セラレタル収束多指道  
 二、依ル増加供給力及企業數多備ニ依ル需用減退ニ基リ檢出供給力ヲ示スモノニシテ之  
 が檢出ニ相當努力力ヲ要スル見込  
 四、余力  
 今國ノ處分後ノ余力ハ今後提出サルベキ収束多受理ト今國審議ノ際照会ノ上保  
 留トナリタル分及逓信局ノ其四、四半期割當量等ノ供給分トナリ



(1) 滿洲  
 中滿地区  
 滿鮮地方電力供給状況

年度	供給力 (キロワット)	需要電力 (キロワット)	余力 (キロワット)	備考
昭和十八年度	二〇〇,〇〇〇	一一〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	
昭和十九年度	二九〇,〇〇〇	一七〇,〇〇〇	一二〇,〇〇〇	
昭和二十年度	四二〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	一二〇,〇〇〇	需用電力中三南 滿地区へ送電 一二万キロワット を含む

(12) 南滿地区



朝鮮

年度	供給力 (キロワット)	需要電力 (キロワット)	余力 (キロワット)	備考
昭和十八年度	六〇〇,〇〇〇	五六〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇	
昭和十九年度	七〇〇,〇〇〇	六四〇,〇〇〇	七〇,〇〇〇	
昭和二十年度	八七〇,〇〇〇	七五〇,〇〇〇	一二〇,〇〇〇	供給力中二八中滿地区ヨリ 度電一ニオキロワット ヲ含ム

年度	供給力 (キロワット)	需要電力 (キロワット)	余力 (キロワット)	備考
昭和十八年度	一、一六〇,〇〇〇	一、一七〇,〇〇〇	不定 一〇,〇〇〇	
昭和十九年度	一、三二〇,〇〇〇	一、三〇〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	
昭和二十年度	一、三三〇,〇〇〇	一、三三〇,〇〇〇	二〇,〇〇〇	



表(十) 電力需要調(台湾)

昭和十八年末	昭和十九年末	昭和二十年末	昭和二十一年末
陸軍々需 二〇〇	三五〇	五〇〇	六七〇
海軍々需 三、六五〇	五、三〇〇	九、二〇〇	二〇、七〇〇
充足軍需 一〇、八五〇	二三、五五〇	三三、〇五〇	三九、〇五〇
一般需要 二五、四〇〇	四八、三六〇	七六、七六〇	一五六、八六〇
計 四八、一〇〇 KW	一三〇、五六〇	二〇八、五〇〇	四〇一、二八〇
供給力増加 (企鼠院(査定) 三依ルモ)	六五、六一三	五八、二五〇	八六、〇〇〇

三五



別表(上)

内 地	朝鮮	台湾	樺太	満洲	蒙 疆	支 那	佛 印	泰	マ ラ イ	フィ リ ピ ン	東 印 度	ボル ネ オ	印 度	濠 洲	ニュ ー ジ ー ラ ン ド	合 計
164	48	26	2	6	6	24	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
40	8	6	0	8	8	56	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	4	2	0	4	4	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	2	1	0	2	2	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	1	0.5	0	1	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
164	48	26	2	6	6	24	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
40	8	6	0	8	8	56	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	4	2	0	4	4	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	2	1	0	2	2	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	1	0.5	0	1	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
164	48	26	2	6	6	24	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
40	8	6	0	8	8	56	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	4	2	0	4	4	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	2	1	0	2	2	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	1	0.5	0	1	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

大東亜圏内ノ発電水力

既開  
発  
水力  
(單位 4KW)

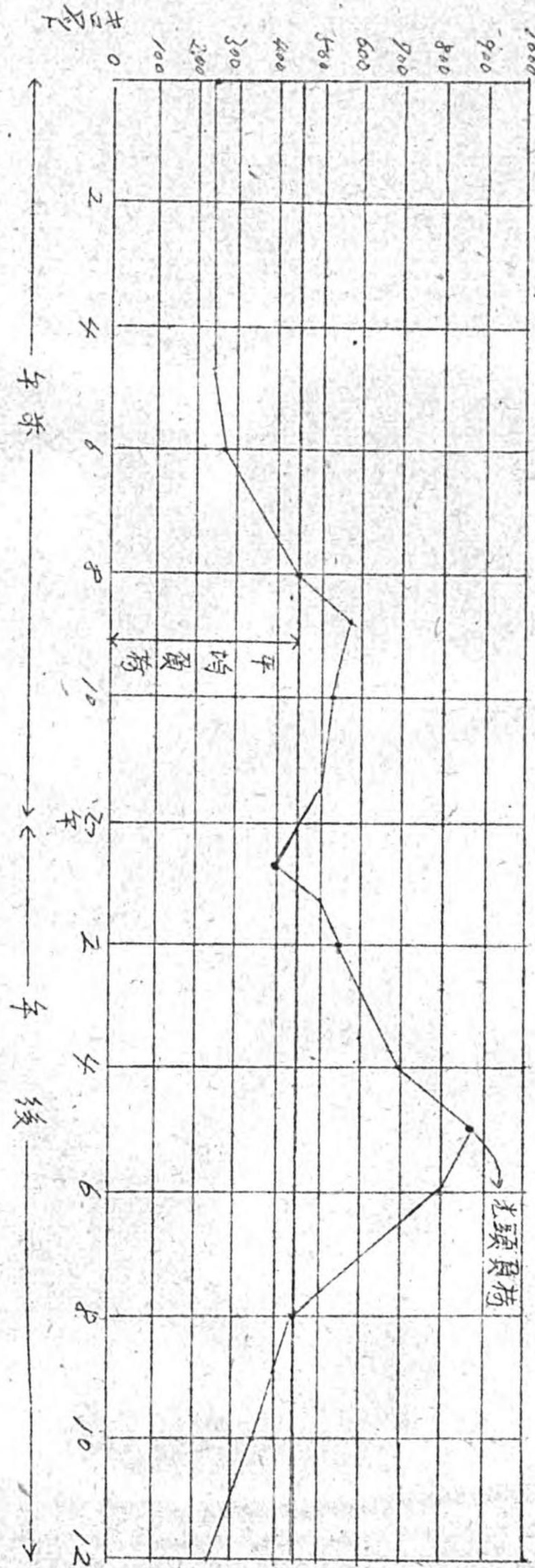
三  
F  
イ

片



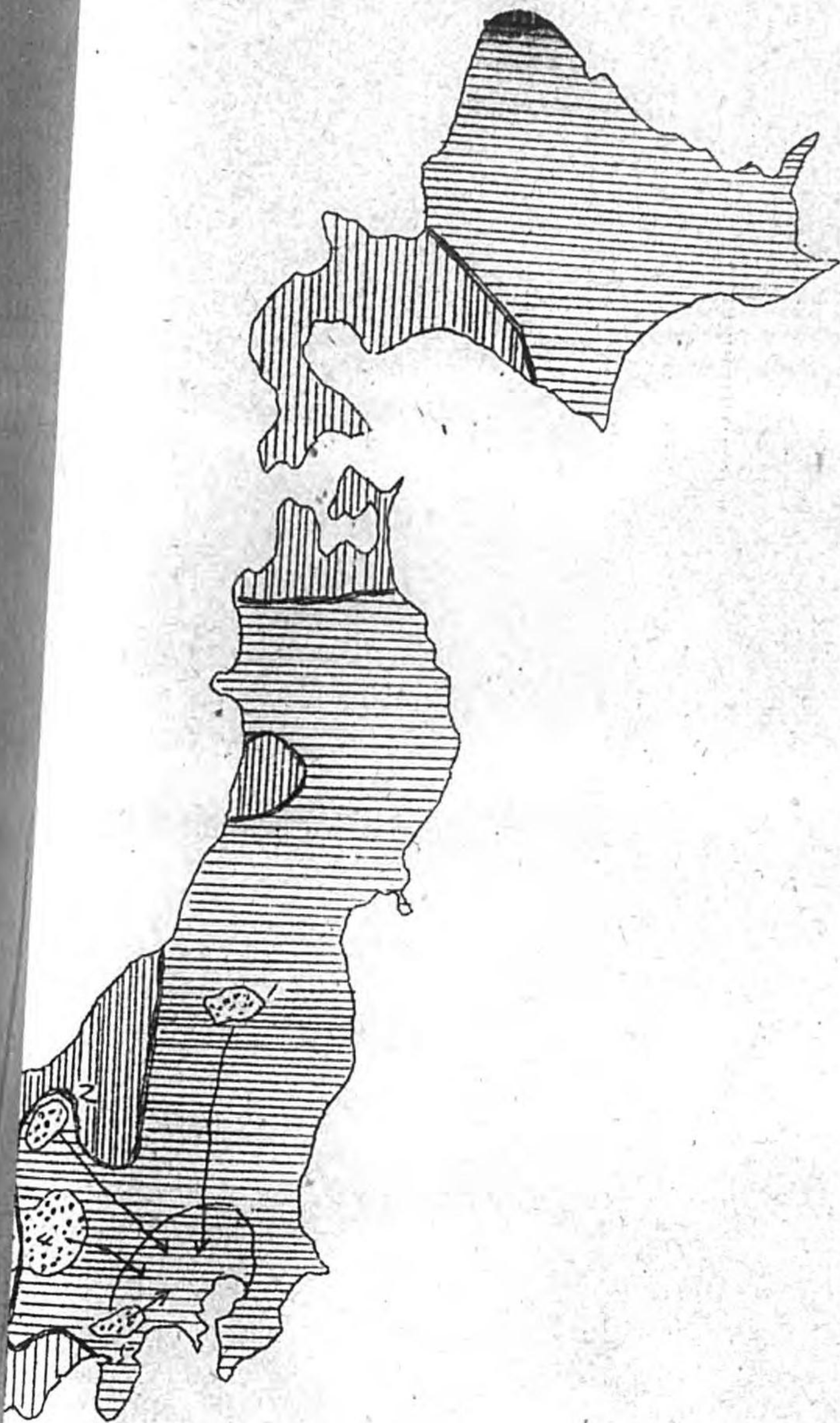
別表(三)

日負荷曲線



三ノ





別表(十三)

(一) 主要工業地帶  
 (二) 水力電源及送電略圖  
 周被數別地域圖

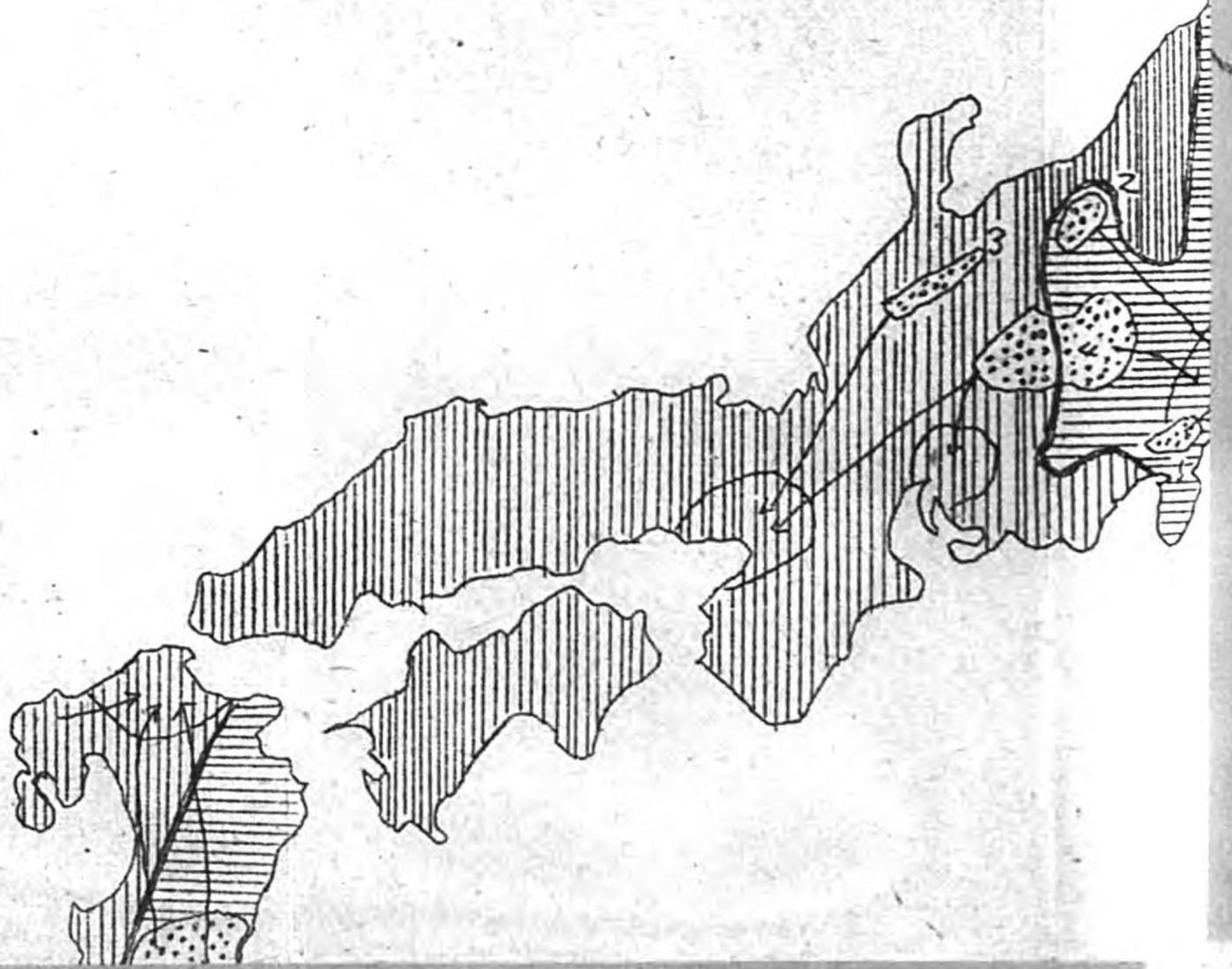




—  
六〇サイクル



—  
五〇サイクル





二、今後ニ於ケル電力拡充対策

岩田 研究生

三片 R

(一) 実施方針

- 1. 施設ノ必要の拡充ニ建設資材ノ迅速ナル能力化ト徹底的節約
- 2. 重要ヲ指向シ概ネ左ノ要領ニ依リ之ヲ行フ。
  - 1. 完成年度ノ速カナルモノニ資材勞務ヲ重要的ニ集中スルコト
  - 2. 建設速度ノ飛躍的増進ヲ期スル為ニ中規模水路式発電地帯ノ開発ニ主力ヲ集中ス
  - 3. 石炭供給ノ趨勢ニ鑑ミ燃料資源ニ対スル依存度ヲ極力脱却セル強力ナル動力態勢ノ確立
  - (F) (1) 水力発電力ノ緊急増強
  - (2) 火力発電ノ建設ハ概ネ左ノ場合ニ之ヲ限定ス
    - (a) 産炭地域ニ於ケル粗悪炭処理ヲ目的トスルモノ
    - (b) 石炭ノ複合的利用ヲ目的トスルモノ
    - (c) 工場作業ニ伴ヒ副次的ニ發生スル低級燃料ノ処理ヲ目的トスルモノ
- 4. 既時ノ建設方式ヲ確立シ建設資材ノ徹底的節約ヲ圖ル
- 5. 現有電力施設ノ動員



(一) 設備拡充計画 (十八年度)

(單位キロワット)

三戸

地域	内地		朝鮮		台湾		合計
	水力	火力	水力	火力	水力	火力	
十七年度末發電設備能力	五、五二五、〇〇〇	三、〇四三、〇〇〇	八、五六八、〇〇〇	一、一七六、六九〇	二、五二二、三九五	五、四三三、三四	一〇、一四〇、八二三
十八年度末發電設備能力目標	五、八二六、九〇〇	三、一五〇、〇〇〇	八、九七六、九〇〇	一、三二一、二九〇	三、〇五、八九五	五、六三三、三四	一〇、七九八、八二三
増加	三〇一、九〇〇	一〇七、〇〇〇	四〇八、九〇〇	一九三、六〇〇	五三、五〇〇	二、〇〇〇	六五八、〇〇〇
約六五%ナリ							

註、實際供給力ハ設備能力ニ対シ平均約六五%ナリ



(三) 將來ノ電力供給關係ノ見透  
 我々ノ熾烈化ニ伴フ造船及航空機ノ絕對的増産ハ電力需要ノ  
 飛躍的増大ヲ伴フモノ註、飛行機一台製作ニ要スル電力ハ平  
 均六五KWヲ要ス之ガ供給ノ理想的均衡ノ維持ハ實現困難ナリ。  
 内地供給關係ヲ想左、如シ(附表ニ參照)

年度	18年	19年	20年	21年	22年
需要増加	713 KW	1491 KW	1894 KW	2470	2970

供給力増加	A 新設分	291	570	900	1135	1417
	B 勤員供給力	283	437	544	596	621
	計	574	1007	1444	1731	2038

差引不足 139 484 454 739 932  
 (註、勤員供給力ニハ企業設備分ヲ含ム) (概算ナリ)

但右記数字ハ生松ガ予定通りニ遂行サレタル場合ノ予想需要増加電  
 力量ニシテ、ヤ、希望的数字タルヲ免レズ。ムコノ業界ニ於テハ現在ノ生  
 松進捗状況ヨリ判断ニテ實際需要増加電力ハ左ノ如キ数量ナラントノ  
 觀測アリ。

年度	18年	19年	20年	21年	22年
需要増加	439	803	1176	1538	1842
供給力増加	574	1007	1444	1731	2038
差引過剩	135	204	268	193	196



一才供給力増加中既存設備ノ動員ニヨル供給力増加モヤ、希望的  
数字ニシテ実現性ハ五割以下ナルベク、且新設供給力ハ専ラ鋼材ノ實際  
配給量ニ依存シ少クモ計十乃至十一不越ノ配給ヲ必要トスルモノナリ。

(附表二号参照)

(四) 將來ノ電力供給周傍ノ對策

次頁材料勞務ノ確保及既存設備ノ動員ニヨル供給力ノ増加等ヲ計ルハ  
論ヲ俟ザル所ナルモ、前述ノ如ク絕對量ニ於テ不足ナル故、電力供給  
對照ヲ二段構ヘトシ、決戦經濟ノ能動性ニ對シテセシムルト共ニ全作トシ  
テノ計畫性ヲ保持シ電力供給均衡ヲ固ル、外地レガ打解策無シ  
即チ電力需要ヲ絕對必要戰軍電力需要(鐵鋼、石炭、輕金屬、  
船舶、航空機、兵器產業並ニ市民戰時生活維持ニ必要ナル食糧肉類)  
トニ義的電力需要(戰局、進展如何ニヨリ其ノ供給ヲ中止セシムルニ  
トアルベキモノ)トニ分チテテハ絕對確實ナル供給力増加ヲ  
以テ此カ需要ニ引當テ、後者ニ對シテハ電力合理化使用等ニヨル檢  
出電力ノ如キ不確實ナルモノヲ以テ引當テ斯クノ如クシテ常ニテ者  
ニ對スル供給力ノミヲ確保セントス。尚此處ニ注目ス可キハ行政  
措置ノ簡捷化ノ必要ナリ、即チ發電所建設準備調査命令ノ  
發セラレテ以來建設命令發令セラレヨシ約一ケ年ヲ要シ其ノ間金為  
ニ日時ヲ過スヲ通例トス。

以上、

三三

三五

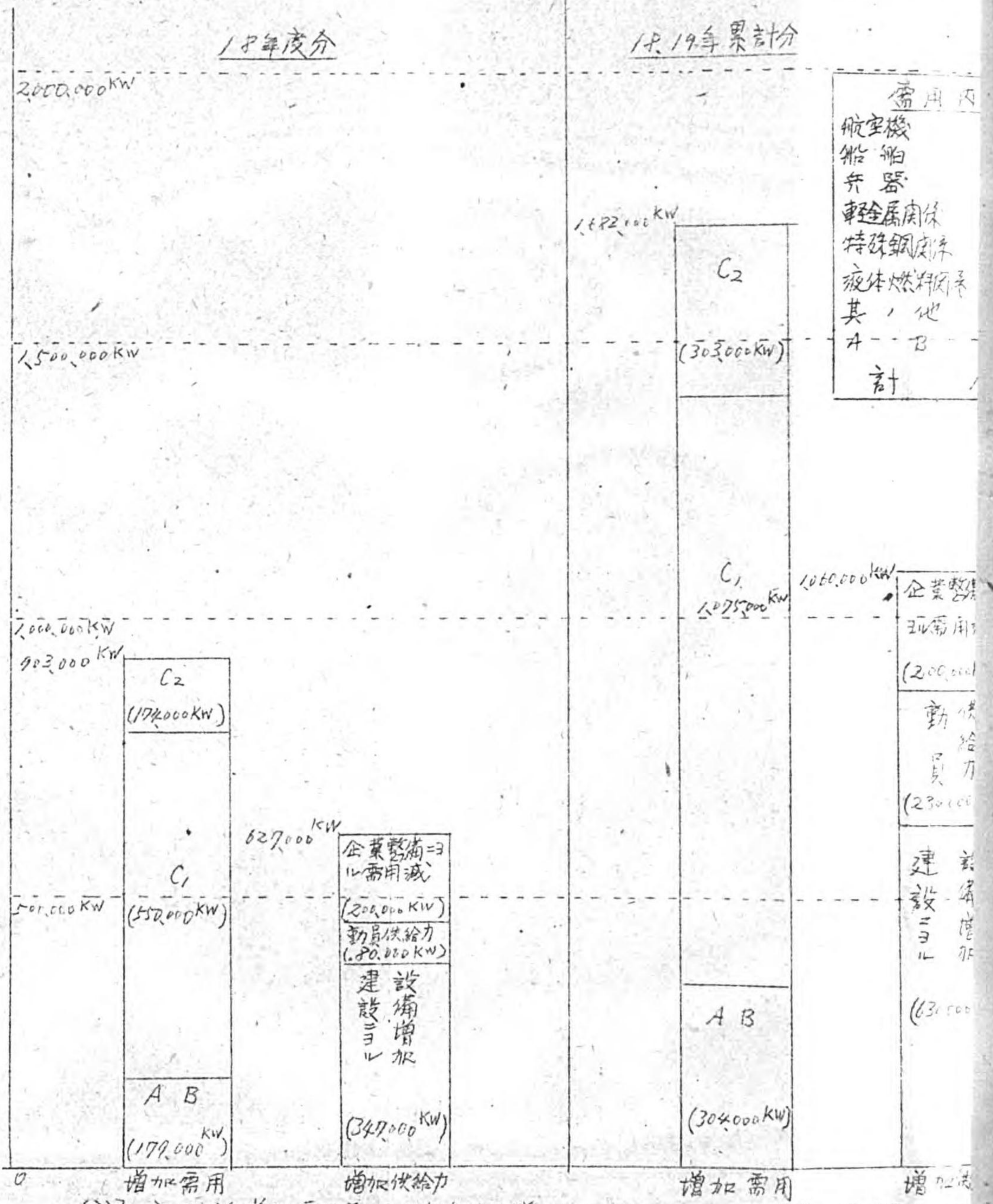






自昭和19年度  
至昭和20年度 内地電力需給對照

附表第一号



[註] 1. 18,19年增加需用電力は各省連絡會議ニ於テ決定セルモノ、20年增加需用電力ハ昭



附表二 号

III 自昭和17年度 電力需給曲線

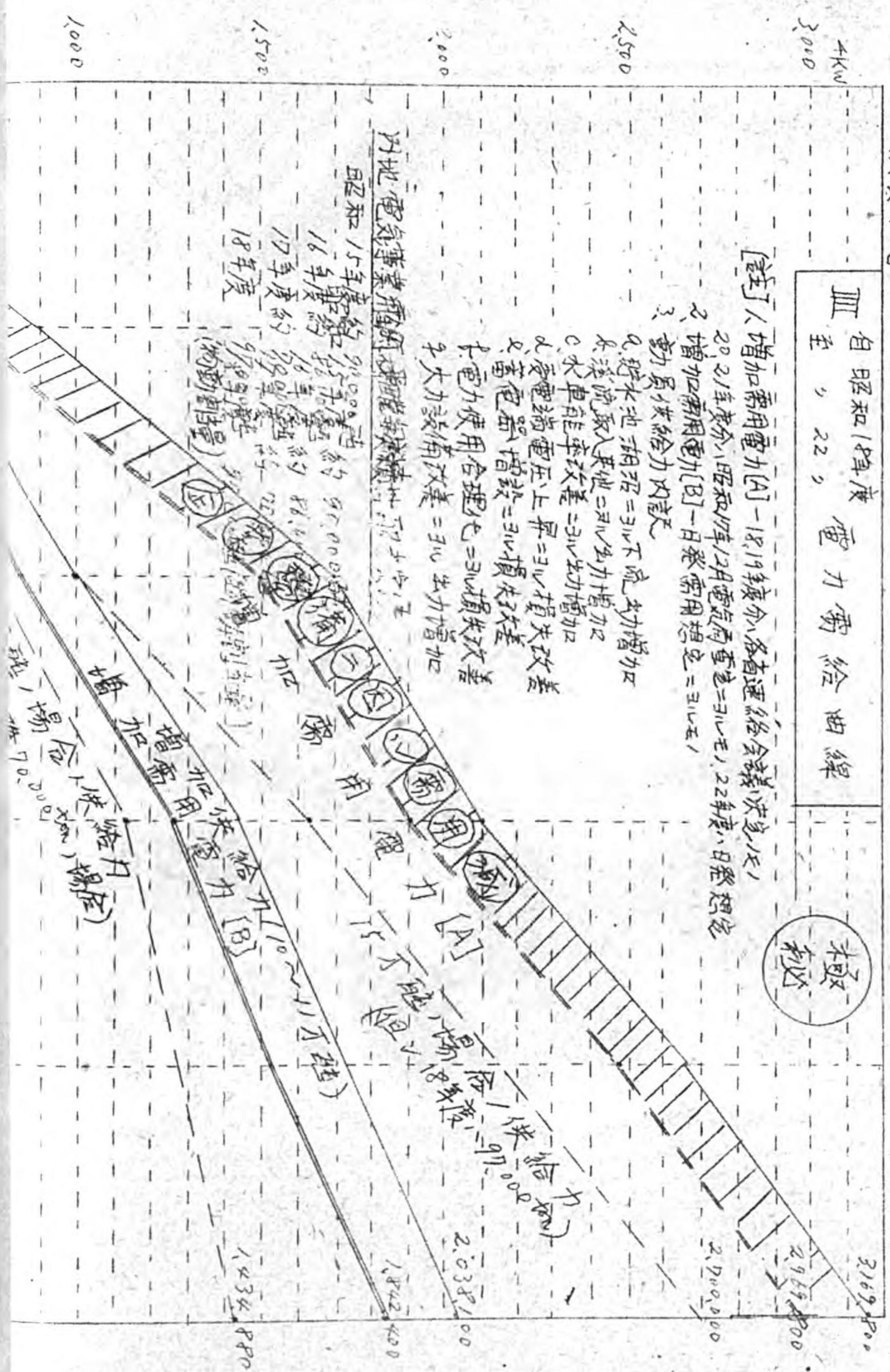
極秘

[註] 1. 增加需用電力[A] - 18, 19年度分, 各直運送會議決定  
 20. 21年度分, 昭和17年12月電氣局査定=ヨルE, 22年度, 日整想定  
 2. 增加需用電力[B] - 日整需用想定=ヨルE  
 3. 動力供給力内訳

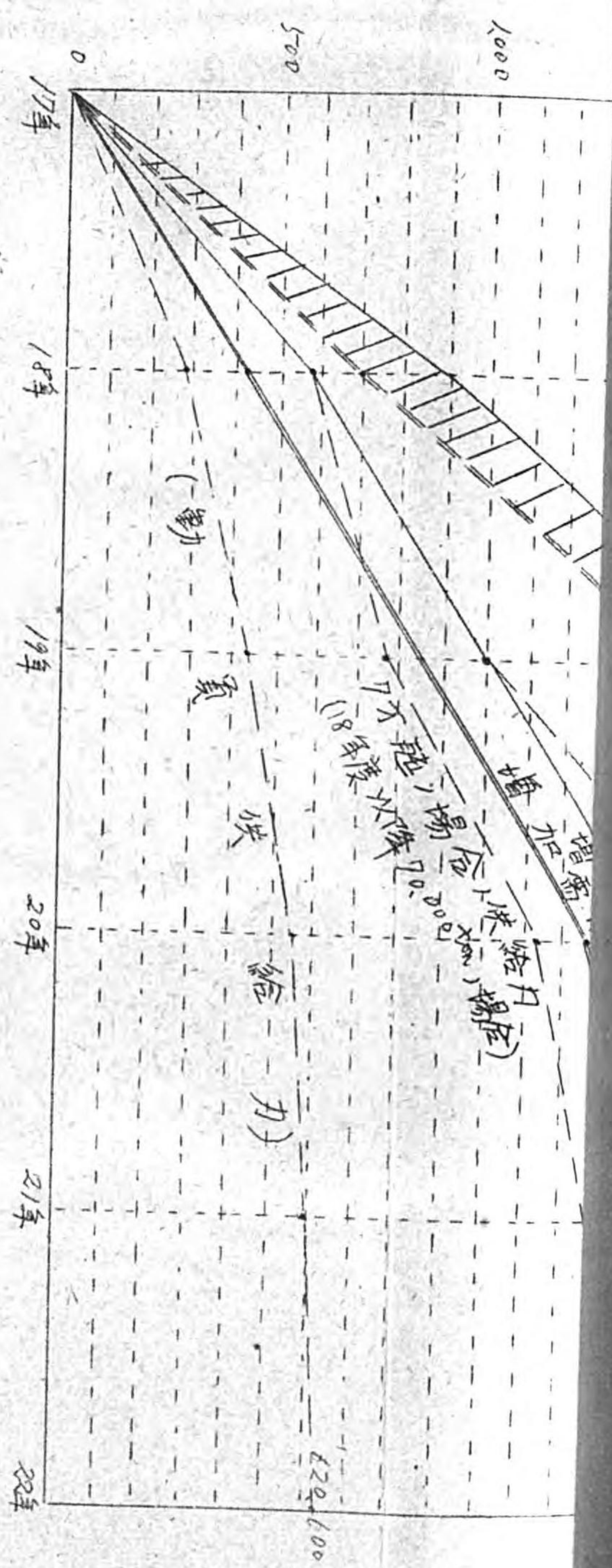
- 1. 貯水池湖沼=ヨル下流出力増加
- 2. 溪流取入其他=ヨル出力増加
- 3. 水車能率改善=ヨル出力増加
- 4. 変電端電圧上昇=ヨル損失改善
- 5. 蓄電器増設=ヨル損失改善
- 6. 電力使用合理化=ヨル損失改善
- 7. 火力設備改善=ヨル出力増加

内地電氣事業所給電設備増進地別出力

昭和15年度約 91,000kw  
 16年度約 86,000kw  
 17年度約 89,000kw  
 18年度約 97,000kw  
 (物動別別量)









佐尉官



機密

(七)

政

政

- (1) 國家實力ノ形成及配分  
飯田 研究生
- (2) 軍事費膨張ノ現況及其ノ對策  
三枝 研究生
- (3) 大東亞ニ於ケル資金交流ノ現況  
吉澤 研究生
- (4) 大東亞ニ於ケル物資交流ノ現況  
越村 研究生

處理	指 定 者
用済後直ニ返却	

三ノイ

(7)



I P S

Roll # 98



(1) 國家資力ノ形成又配分——國家資力計畫ノ設定

一 國家資力計畫ノ目標

(1) 戰時財政經濟運営ノ主目標ハ戰争目的ノ達成、爲國家經濟力ノ最高度ニ於ケル其中心ニ其効率ノ最高度ノ發揮ヨリ之ヲ爲國民經濟ニ對スル綜合的見地ニ基キ計畫的ナル指導統制ハ其必然ノ要請ナルカ、昭和十六年七月閣議決定「財政金融基本方針策要綱」ハ右ノ要請ニ基キ

(1) 國民經濟ノ總生産額其他ヲ綜合的ニ勘案シテ國家資力ヲ概定シ、(2) 之ニ基キ國民が國家總力戰下ニ於テ必要ナル最低限度ノ生活ヲ維持スル爲消費ニ充ツキ部及(國民消費資金)ト租税及國民貯蓄等ノ形態ニ依リ動員スルキ部及(動員資金)トヲ劃定シ、(3) 右動員資金ノ總量ヲ物資動員計畫等ト照應シテ戰費其他ノ財政需要、生産上ノ所要等ト彼此勘案シテ國家總力戰最高度ニ發揮スル地ヲ財政資金及産業資金トニ配分スルキ「國家資力動員計畫」ヲ設定スルキニテ、(4) 右國家資力動員計畫ノ設定ニ當テハ國民經濟ニ供給セラルル物資が國家總力戰ノ見地ヨリテ最モ効率ヨキ均衡ニ於テ消費用貯藏用生産用ニ配分セラルルキヲ旨トスル「テアル」

A

國民經濟ノ總力算

飯田 研 究 生



(3) 國家治員力

三〇一

右自標、下ニ概定セラルベキ國家治員力トハ戰爭遂行ニ當リ國民經濟ヨリ國家目的ノ爲ニ動員集中シ得ベキ總經濟力(物資貯蓄ニ勞務ノ總量ヲ根幹トセル)ヲ治員金面ヨリ把握シタルモノテアツテ換言スレバ國家資金動員計畫ノ基礎タリ得ベキ實質的ナル治員金ノ總量デアル。從ツテ其レハ所謂國民所得(當該一年度尙ニ於テ費用ヲ超ヘテ新ニ生産セラレタル物資ノ價額及加工若ハ輸送)等ニ依リ増加セル物資ノ價額並ニ對價ノ支拂ハル、勤勞價額ニ海外投資收支差額ヲ加除シタルモノ)ヲ中核トスルニトハ勿論デアルが、更ニ之ヲ超ヘテ過去ノ蓄積ノ動員ヲモ包含(即チ經常的所得ノニ限定サレズ、又必スシモ常ニ必要費用ノ控除ヲ要セス)スルノミナラス進ニテハ將來ノ生産力ヲモ含ミ得ルモノデアル。

以上ノ如ク國家治員力ハ戰爭遂行經濟國力ノ綜合的表現デアルが其ノ昭和十七年度推定実績及十八年度概算額ハ左表ノ如クデアリテ國民所得ノ増加必スシモ大ナラザルニ拘ハズ國民所得以外ノ所得特ニ海外資金動員額ノ飛躍的増大ハ戰時財政經濟發展ノ基本的特徴ヲ現示スルト共ニ大東亞各域ノ帝國ニ對スル財政產業的寄與ヲ具體化スルモノトシテ注目スベキデアル。



昭和十八年度國家總力概算 (單位百萬元)

	十八年度概算	十七年度実績	比較増減(△)
國民所得	四八、四〇〇	四六、九三六	一、四六四
(一) 物的所得	四〇、四六〇	三八、七〇〇	一、七六〇
(二) 用役勤勞所得	六一、六三三	六六、七七六	△五、一四三
(三) 海外事業勞務利息等	一、七七七	一、五六〇	二、二一七
國民所得外所得	二、一九八	一、四五七	七、四二一
(一) 既存資本所得	三、九六〇	三、二四四	七、一六六
(二) 海外資金動員	六、八四六	三、〇六九	三、七七七
(三) 振替所得	五、二七二	三、九九八	一、二七四
(四) 其他	五、九一〇	四、二五六	一、六五四
合計國家總力總額	七〇、三八八	六一、五〇三	八、八八五



二 國家資金計畫之內容

- (1) 綜合的ナル國家資金計畫、設定ハ戰時財政經濟ノ運営ト必  
然、要請タルニ拘ラス從未ハ財政資金ニ関シ歲入歳出豫算并産業  
資金ニ関シ資金統制計畫等が個別的ニ設定セラレタルニ止マリ或程度  
ノ綜合性ヲ有スルモノトシテハ僅カニ國民貯蓄計畫が存スルノミデアリ有機  
的綜合的ナル國家計畫ハ之ヲ欠イテ居シタ次第デアアル。
- 從ツテ完全ナル綜合性ヲ有スル國家資金計畫ノ設定ハ亦年度が最初デ  
アリ過去ノ計畫ト比較対照シテ之が推初ヲ檢計スルニトハ困難デアアル（既存資  
金統制計畫ハ前述ノ如ク局部的計畫ニ過ギズ之が檢討ハ省略スル）
- (2) 昭和十八年度國家資金計畫並ニ之ニ対照セラレルベキ十七年度推定実績  
ハ左ノ如クデアアル。



第一

昭和十八年度國家家資金計畫（抄）  
本計畫ハ戰爭ノ現段階ノ要請ニ即應シテ我國經濟力ノ動員  
戦カ化ヲ資金面ヨリ把握計畫化スルト共ニ該計畫達成上所要ノ  
措置ヲ講ジ以ツテ戰爭完遂ニ遺憾ナカラシムルニテ自途トシテ之ヲ  
策定ス

第二

本計畫策定ノ基本要領九ノ如シ  
一 財政金融基本方針策要綱ノ決定セル國家家資金動員計畫ノ方式  
ニ則リ昭和十八年度國家家資金總額ヲ概定シ之ニ基キ財政及産業  
ノ爲動員スベキ資金額ニ國民消費資金ヲ畫定スルニト  
二 右國家家資金ハ我國總生産額ヲ基礎トシ大東亞各域ノ我國ニ對スル  
資力ノ寄與等ヲ勘案シテ之ヲ概定スルモトシ生産勞務、交易等ニ  
關スル諸計畫ヲ綜合シツテ戰爭遂行ノ要スル最方ノ戰時經濟活動  
ノ實現ニ應ハ應セラルニト  
三 動員資金ハ財政、産業及對外投資資金ヲ通シ當面作戰遂行ト  
戦力急速増強ノ爲ニ綜合所要量ニ基キ物資動員計畫等ト  
ノ照應關係ヲ考慮シテ畫定スルト共ニ之ヲ財政其他各資金ニ對シ  
相互ニ有機的均衡アル配分ヲ爲スニト  
四 國民消費資金ハ國民ノ戰時生活ノ保持ト所要動員資金充足トノ  
關係ヲ考慮シ消費財生産等ニ照應シテ之ヲ概定スルニト



第三 本計畫一九八五計畫トス

- 一 資金綜合計畫
- (一) 資金動員計畫
- (二) 動員資金配分計畫
- (三) 動員資金調達計畫
- 二 蓄積計畫
- 三 公債計畫
- 四 産業資金計畫
- 五 对外投資計畫



一 資金綜合計畫

三九一

昭和十八年度国家資力ヲ国民所得四百八十四億円、  
 国民所得以外ノ資金二百十九億円、合計七百三十四億円、  
 余ト概定シ、之ニ基キ左ノ如ク財政並ニ産業等ニ付所要  
 資金ノ動員、配分並ニ調達計畫ヲ畫定ス

本計畫達成上特ニ左記事項ノ実施ヲ図ルモノトス

(一) 財政並ニ産業資力ノ充足ハ專ラ国家資力ノ確保取増  
 強ニ俟ツモノナルヲ以テ緊急物資ノ増産進行並ニ遊休設  
 備ノ転換运用ニ付各方面ヨリ果斷ナル措置ヲ講ズルニト

(二) 国民消費資金ノ實質的壓縮並ニ国民ノ收入ノ消費資金ニ  
 対スル比率ノ拡大等ニ鑑ミ強カナル貯蓄動員方策ヲ實施  
 スルト共ニ消費統制ノ強化、国民消費生活ノ具體的ナル指導  
 消費財ノ戦時規格化徹底等ノ措置ヲ講ズルニト

(三) (四) (略)



(一) 次資金 勤員計畫

(單位一百萬圓)

十八年度 計畫

十七年度 実績

比較増減(△)

國家資金總額	勤員資金	國內勤員資金	新設政課徵稅	租稅	證券及專賣金	其他	個人貯蓄勤員	民間金融機關	官廳	証券投資	法人資金勤員等	其他	現地勤員資金	財政課徵	對本邦投資	其他	國民有資本資金	國民消費基金總額	(消費稅等)
70.38	50.65	43.89	3.44	1.94	1.44	1.02	2.33	2.06	1.60	1.27	1.49	1.62	6.84	1.84	1.04	1.26	19.67	13.33	8.20
66.95	37.93	30.81	0.77	0.34	0.34	0.11	1.59	1.98	1.91	0.98	0.71	0.89	3.62	0.87	0.38	0.79	11.33	6.44	3.23
△ 3.43	△ 12.72	△ 13.08	△ 2.67	△ 1.60	△ 0.10	△ 0.91	△ 0.11	△ 0.08	△ 0.69	△ 0.29	△ 0.78	△ 0.73	△ 3.22	△ 0.97	△ 0.66	△ 0.47	△ 8.34	△ 6.89	△ 5.00

三六一



(一) 勤員資金配分計畫 (單位: 百方丹)

勤員資金總額	十八年度計畫	十七年度実績	比較増減(△)
同 配分	50,655	37,900	12,755
一 財政資金	50,655	37,900	12,755
(一) 國庫財政	37,000	24,974	12,026
(二) 地方財政	13,655	12,926	729
(三) 行政費	3,455	2,153	1,302
(四) 投資費	1,153	704	449
(二) 地方財政	1,153	704	449
二 産業資金	1,153	581	572
三 對外投資資金	1,153	581	572
四 調整準備金	1,153	581	572

三九一



(三) 動員資金調達計畫

(單位 百萬元)

項目	十八年度		比較增減(%)
	計畫	實際	
一、租稅等普通收入	131.4	139.4	6.8
(一) 國庫收入	102.1	105.5	3.3
(二) 地方收入	29.3	33.9	15.7
二、公債	11.5	11.5	0.0
(一) 國債及借入金	9.9	9.9	0.0
(二) 地方債	1.6	1.6	0.0
三、現地國庫收入	34.3	34.5	0.6
小計	177.5	189.9	10.7
四、企業自己資金	16.5	16.6	0.6
五、株式	3.9	3.4	-12.8
六、社債	2.6	3.2	23.1
七、借入金	48.1	49.3	2.5
八、計未定	141.7	191.5	35.2

三九一



- 二 蓄積計畫
- 三 公債計畫
- 四 產業資金計畫
- 五 海外投資計畫

口述

三

(3)(2)(1)

國家資金計畫，遂行——資金動員，確保

財政課徵收——大東亞地城，財政至省，取寄與

國內資金動員，根幹——三三制，國民貯蓄——國民貯蓄確保，絕体的必要

國民貯蓄增加，趨勢  
國民貯蓄增加，現狀——戰時至序運營，綜合的指標

國民貯蓄增加額

國債發行額——政府資金撒布超過額——國債消化額

（國債消化率）

國債不消化額——通貨膨脹額

適正流通貨流通額——物價安定——基本條件

(4) 戰費負擔，平衡







最近ニ於ケル我國歳出ノ構成

(單位百萬元)

年	度	總	額	行政	費	軍事	費	國	債	費
昭和十一年度		二、二八二(一〇%)		八四〇(三六%)		一、〇七八(四八%)		三六三(一六%)		
昭和十二年度		五、二四九(〃)		一、〇七二(二〇%)		三、七七六(七三%)		三九九(八)		
昭和十三年度		七、八一九(〃)		一、三〇一(一七%)		六、〇一六(七七%)		五〇二(六)		
昭和十四年度		八、五六三(〃)		一、六五五(一九%)		六、二三三(七三%)		六七五(八)		
昭和十五年度		一、一〇三三(〃)		三、二九七(三〇%)		七、七六二(七〇%)		九七四(九)		
昭和十六年度		一、九四四六(〃)		三、二八七(一七%)		一、四九二(一七七%)		一、二三八(六)		
昭和十七年度		二、四三一(〃)		四、四四三(一八%)		一、八〇七五(七四%)		一、七九三(七)		
昭和十八年度		三、六〇三五(〃)		六、六七八(一八%)		二、七〇〇一(七五%)		二、三三五(七)		

備

考

一、本表ハ一般會計及臨時軍事費ノ總計ニ付作成セリ  
 二、昭和十四年度以前ハ決算額、昭和十五年度以降及軍事費ハ予算額ニ依ル



臨時軍事費特別會計

(1) 軍事費膨脹の現況

支那事変勃発後、以て未事変迄大ニ伴フ所要ノ軍事費ニ  
 由テテハ先例ニ倣ヒ臨時軍事費特別會計ヲ設置シ  
 一取ノ歳出止戻入ト区分シ事件ノ終局迄一會計年度トシ  
 テ特別ニ整理スルコトトシ之ニ準ズル法律案ハ昭和十二年  
 才七十一ニ議會、協賛ヲ經今日ニ及ビリ

事変勃発当初、昭和十二年度ニ於テハ軍事費ハ一般  
 會計ヨリ移シ整理シタル分及才七十二議會ニ於テ協賛  
 ヲ經タル分トヲ合シニ五四。百方圓ニ過ガザリニ正剛後事  
 変ノ進展ニ伴フ事態ニ對スル厚積不一年間ノ經費ヲ昭  
 和十三年度才七十三議會以て末五年年度四五。百方圓内外ヲ追  
 加算トシテ議會ニ提出シ居リタルニ昭和十六年度ニ入り俄  
 ニ極東及歐米ヲ中心トスル國際情勢カノ著キ推移ニ即志シ  
 事変處理ノ完遂ニ期スル爲新ナル構想ノ下ニ軍備ノ拡充  
 産化ヲ絶対ニ必要トスルニ至リ前後二回ニ亘リ追加算ヲ  
 提出セルモ更ニ支那事変ハ急激ニ大東亞戰爭トナリタル  
 ヲ以テ茲ニ軍事緊急ノ需要ヲ充足スル爲更ニ追加算ヲ



案、提出ヲ見、昭和十六年度ニ於ケル三回ニ一旦臨時軍  
 事費追加予算ノ合計ハ實ニ一、四八〇、〇〇〇、〇〇〇  
 國財政史上ニ一大轉機ヲ劃セリ。爾來大東亞戰爭ノ推  
 移、發展ト共ニ之カ遂行ニ必要ナル至其ハ愈々膨張シ、  
 和十七年度ニ於テハ一、八〇〇、〇〇〇、〇〇〇、  
 テハ二七、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、  
 變以テ現在迄、臨時軍事費特別會計ヲ提出シ、左那事  
 別表ノ如ク實ニ七、四一三、八百、〇〇〇、  
 額ニ達セリ。現額ハ

三九〇



別表 臨時軍事費豫算現額區分一覽

區分	昭和三十二年 度						昭和三十三年 度						昭和三十四年 度						昭和三十五年 度					
	第一級	第二級	第三級	第四級	第五級	第六級	第一級	第二級	第三級	第四級	第五級	第六級	第一級	第二級	第三級	第四級	第五級	第六級	第一級	第二級	第三級	第四級	第五級	第六級
臨時軍事費	313,306	1,041,000	100,000	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000
陸軍臨時軍事費	313,306	1,041,000	100,000	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000	313,306	1,041,000
海軍臨時軍事費	100,000	349,950	250,000	349,950	100,000	349,950	100,000	349,950	100,000	349,950	100,000	349,950	100,000	349,950	100,000	349,950	100,000	349,950	100,000	349,950	100,000	349,950	100,000	349,950
予備費	100,000	250,000	550,000	250,000	100,000	250,000	550,000	250,000	100,000	250,000	550,000	250,000	100,000	250,000	550,000	250,000	100,000	250,000	550,000	250,000	100,000	250,000	550,000	250,000
臨時軍事費	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620
右財源	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620
公債	411,383	2,022,620	418,000	2,022,620	411,383	2,022,620	418,000	2,022,620	411,383	2,022,620	418,000	2,022,620	411,383	2,022,620	418,000	2,022,620	411,383	2,022,620	418,000	2,022,620	411,383	2,022,620	418,000	2,022,620
借入金	36,591	0	0	0	36,591	0	0	0	36,591	0	0	0	36,591	0	0	0	36,591	0	0	0	36,591	0	0	0
他層計り受入	6,833	0	0	0	6,833	0	0	0	6,833	0	0	0	6,833	0	0	0	6,833	0	0	0	6,833	0	0	0
北支軍費特別統	66,948	0	0	0	66,948	0	0	0	66,948	0	0	0	66,948	0	0	0	66,948	0	0	0	66,948	0	0	0
軍車費貸付金	0	0	1,000	0	0	0	1,000	0	0	0	1,000	0	0	0	1,000	0	0	0	0	0	1,000	0	0	0
物品購下代其他雜收入	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
奇	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620	517,406	2,022,620	418,000	2,022,620
差引財源超過額	36,591	0	0	0	36,591	0	0	0	36,591	0	0	0	36,591	0	0	0	36,591	0	0	0	36,591	0	0	0

注 (1) 右財源超過額は借入金並実行現金セヨル財源欠陥額  
 (2) 本表、他昭和三十六年秋一級層計第二予備金及國庫支出アリ







(四) 臨時軍事費ノ内容

臨時軍事費ノ内容ハ其ノ概畧ヲ以テテ陸軍関係ニ於ケル部隊ノ  
 派遣維持、兵器資材、衣給、救急備、航空要員ノ急速補充、造兵設備ノ  
 増強、古領、鉄道ノ管理改良等ニ関スル經費及海軍関係ニ於ケル艦船  
 部隊ノ派遣維持、航空兵力及軍需品ノ急速充實、工作通信補給  
 其ノ他各種施設ノ急速整備等ニ関スル至費並ニ南方開發基金庫  
 ニ對スル貸付及南方物資ノ取得ニ要スル至費等ヲ計上セリ。  
 尚從來一般會計中ニ編成セラルタル陸海軍至費ハ昭和十七年度ヨリ大  
 戦下軍事ノ現況ニ鑑ミ本首至費ヲ除キ凡テ之ヲ本特別會計中ニ入  
 レ軍ノ需要充足上ノ便宜ヲ圖ルコトトセリ。

臨時軍事費ノ財源取得ノ對策

斯クノ如キ巨額ノ軍事費支弁ノ方法トシテハ其ノ財源ノ大部  
 分ヲ公債ニ依ルハ已ニ得ナル所ナルモ他面租稅其ノ他ノ方法ニヨリ  
 之ガ調達ノ方途ヲ講ズ公債ノ發行ハ可及的ニ之ヲ壓縮セサルベカラズ。



之本年度予算編成ニ關スル閣議決定中ニモ「戰時財政ノ強化ヲ圖ル  
爲メ」普通歳入ノ増加ヲ圖リ又各特別會計ヨリ臨時軍事費  
特別會計又ハ一般會計ニ對シ能フル限リ多額ノ繰入ヲ爲ス等ノ  
方法ヲ講ズ公債ノ発行ハナルベク之ヲ抑制スルコトト謂ハル所ナリ  
斯ノテ昭和十二年軍事費増大ニ伴フ國民ノ消費抑制及購  
買力吸収ノ圖ラシムル爲メ前後七回ニ亘リ大増稅ヲ行ヒ又増稅ニ  
關聯シ數次ノ煙草アルコト等專賣品ノ値上ヲ行ヒ或ハ鐵道運  
賃及通信料ノ改定等ヲ行ヒ之等ニ依ル増稅ノ分ハ凡テ軍事費ノ  
財源ニ充テラルコトトセリ。而シテオハ一議會追加予算ニ對スル  
財源トシテ之等稅制改革等ニ依ル増稅額ノ繰入金額ハ一般會計  
ヨリ四三三六百万円ノ特別會計ヨリ合計五七九百万円ナリ。尚オハ上  
議會ニ於テ成立セル臨時軍事費ニ關シテハ今回新ニ軍ノ現地ニ於テ  
ル支出ノ一部ニ付之ガ財源ヲ南方開發金庫ヨリ借入金ニヨリ調達  
スルコトトセリ。之ハ共榮團ノ諸地域カ共同目的タル至戰遂行ニ備  
カスルコトヲ意味スルモノニシテ今後確立セラルヤキ共榮團地域ノ  
財政取協力制度ノ第一段階ヲ劃スルモノトシテ意義深キモノアリ。  
又雜收入トシテ十八年度ニ於テ一六〇百万円カ許上ナレ居ルガハ主  
トシテ作戰ニ伴フ取得物資ノ売却代金由獲品ノ貸下料等ニシテ  
之ノ兩者ハ当面我が國ニ於ケル内地ノ負担トナシガルモノト解セラル。



因二方八十一議會ニ於テ追加セラルタル臨時軍事費予算額二七、〇〇〇百  
 万円ノ歳入ノ内訳左ノ如シ

公債金	一六、一六三、八〇二千円	(六四%)
貸入金	三、三〇〇、〇〇〇	(一二%)
他會計ヨリ受入	四、九一六、二〇四	(一八%)
支那軍費特別稅	一、六〇〇、八九五	(六%)
軍事納金	一、〇〇〇、〇〇〇	(四%)
物販代金其他雜收入	二七、〇〇〇、〇〇〇	(一〇%)
計	二七、〇〇〇、〇〇〇	(一〇%)

三、財政健全性ノ問題  
 昭和十一年度ニ於ケル一般會計及臨時軍事費特別會計ヲ總括シテ  
 財源尚餘及支出状況ヲ見レバ左ノ如シ。

財源	總額	三六、〇三五	百円	(一〇〇%)
公債及借入金	二、三六七、〇	(六六%)		
租稅及準租稅收入	九、四九一	(二六%)		
其他	六、八七四	(一八%)		
支出	總額	三六、〇三五	百円	(一〇〇%)
行政費	六、六七八	(一八%)		
軍事費	二七、〇〇一	(七五%)		
國債費	二、三五五	(七%)		

三九〇







セラレタリ。今次大戦ニ於テハ英國ハ一九四二、四三年ニ於テ公  
債ノ占ナル割合ハ五二%、米國ハ七三%、租税ニ於テ英國ハ四二  
%、米國ハ二五%ナリ。而シテ現在我國ノ歳入中ノ公債及借入  
金ノ割合ハ六六%、租税及準租税收入ノ割合ハ二六%ナリ。  
國民所得トシテ考スル時ハ、租税負担ノ余力ヲ有スル  
トモ謂フヲ得バ、此等ノ兵ヨリ觀察スルニハ我が國財政ノ現況ハマ  
ヅ以テ健全ナクシテ流ケテキルト謂ヒ得ベシ。然レ由致ハ  
將來更ニ深刻化スルキ戦時ノ考慮ニ入レタリ。現在ノ財政が更ニ  
民至濟ノ不担カ如何ニ存ス。即チ大東亞戦時下ノ現在ノ財政が更ニ  
高度ノ戦時ニ對スル準戦時財政タルノ性格ヲ有スルコトニ存ス。  
國家財政ハソノ性格上國民至濟ノ基礎ノ上ニ立ツモノナルガ故ニ  
此ノ極大ナル財政ヲ賄フ存ニ國民至濟ノ根本的ニ再編成サレ  
ルニ至ス。而シテ此ノ兵ニ關聯シテ資金計画ノ確立ト共ニ公  
債ノ消化、國民貯蓄ノ向題、財政膨張ノ責任ヲスインフレ  
シヨク物價対策ノ向題、金ト相表裏スル物價ノ面カラノ統制  
等、諸向題が存スルモ之等ノ兵ニ關シテ公別途考完スルコ  
トトセリ。



# 最近ノ我國歳入ノ構成

(單位 百万円)

年 度	昭 和 十 一 年 度	昭 和 十 二 年 度	昭 和 十 三 年 度	昭 和 十 四 年 度	昭 和 十 五 年 度	昭 和 十 六 年 度	昭 和 十 七 年 度	昭 和 十 八 年 度	備 考
總 額	三、三七二(一〇%)	五、四五四(〃)	八、一六三(〃)	九、〇三九(〃)	一、一三〇(四)(〃)	一、九一九七(〃)	二、四三二(一)(〃)	三、六〇三(五)(〃)	一、本表ハ一般會計及臨時軍事實費ノ純計ニ付之ヲ作成セリ 二、一般會計ノ昭和十六年以前分ハ決算額、昭和十七年度以降及臨時軍事實費ハ予算額ニ依ル
租 税 及 進 租 税 收 入	一、三八三(五)	一、八七〇(三)	二、四七七(三)	三、一〇〇(三)	四、三六八(三)	五、一四九(三)	七、〇八四(三)	九、四九二(三)	
公 債 及 借 入 金	六、〇九(二)	三、〇七六(五)	五、一三八(六)	五、二二二(五)	五、九五三(五)	一、二七五(六)	一、五五八(六)	二、三六七(六)	
其 他	三、七九(一)	五、〇七(一)	五、四七(一)	七、一七(一)	九、八二(一)	一、二九四(一)	一、六四六(一)	二、八七四(一)	



(一)

大東亜ニ於ケル資金交流ノ現状ト今後ノ見透

吉澤 研究生

(A) 本邦對諸地域

(イ) 本邦對滿洲 交通關係ニ於テ常態的出超ナルモ交易外ニ於ケル巨額ノ政府海外払及海外投資ヲ主因ニ支払超過

(ロ) 本邦對北支 前年度迄ハト殆同傾向ナリシモ本年度ハ交易關係ニ於テ巨額ノ入超ヲ予想セラル、ヲ以テ戰費分担ニ依ル政府海外払ノ著減ヲ響

カス支払超過益々増大ノ見込

(ハ) 本邦對蒙疆 前年度ハ乍僅少受取超過ナリシモ本年度ハ海外投資ノ増大ニ依リ支払超過ノ見込

(ニ) 本邦對中支 (ロ)ト同シク交易ニ於テ巨額ノ逆調予想ナレト、政府海外支出ハ戰費分担ノ關係モアリテ急減結局支払超過ハ昨年比約三分一程度ニ止マル等

(ホ) 本邦對南支 同ジク交易逆調ニ轉スルノミナラス海外投資著増予想セラ

ル、ヲ以テ戰費分担ニ依ル政府海外払ノ急減ニモ不拘支払超過ハ對昨年比半減見込ナルヲ以テ支払超過額減少ナル

(ト) 本邦對泰 本年度ハ輸入激減(昨年ノ本以下)ニ依リ乍些少出超ヲ見ル可

ク、從テ政府海外支払拂ハ倍増予想セラル、モ結局支払超過ハ前年度ノ半以

下ニ止マルヘシ

(テ) 本邦對南方甲地域 交易關係(總テ臨時軍事費特別買上輸出入ニ依リ資金ノ交流ヲ認メス)ニ於テハ約二倍強(昨年比)ノ支払超過予想セラル、モ交易外ニ於テハ乍多少受取超過



(二)

大東亞ニ於ケル資金決済方式

本邦ヲ除ク各地域間ノ現状(附表ニ参照)

- (イ) 滿洲對各地域
  - (ロ) 北支對各地域
  - (ハ) 蒙疆對各地域
  - (ニ) 中支對各地域
  - (ホ) 南支對各地域
  - (ヘ) 乙地域對各地域
  - (ト) 甲地域對各地域
- 何レモ支払超過  
對中支、南支南方ハ支払超過  
對北支以外ハ受取超過  
對蒙疆及南方以外ハ受取超過  
對中支以外ハ受取超過  
僅少對南支等ニ払超アル外受取  
泰ニ払超アル外受取超過

(A) 現状ノ如キモ敢テ經過的發展途上ノモノトシテ把握スヘキモノナリ。

- (B) 別紙圖表ノ如キモ敢テ經過的發展途上ノモノトシテ把握スヘキモノナリ。
- (イ) 將米ノ見透ト理想型態(目標)
- (ロ) 地域ト圈外間ノ為替取引ハ總テ日本円貨表示トスルコト
- (ハ) 各地域ト圈外間ノ為替取引ハ總テ日本円貨表示トスルコト
- (ニ) 各地域ハ夫々其中央銀行發行ニ係ル通貨ヲ以テ幣制統一ヲ行ヒ且(一)
- (ホ) 特別円為替ノ集中制ヲ實施スルコト
- (ヘ) 各中央銀行ハ日本銀行ニ円勘定ヲ開設シ當該地域ノ對外為替決済
- (ト) 本邦並ニ右円勘定ノ為替管理ハ有機的且協力的ニ其ノ為替取引ヲ律
- (チ) 本邦並ニ各地域ノ為替管理ハ有機的且協力的ニ其ノ為替取引ヲ律
- (リ) 本邦並ニ各地域ノ為替管理ハ有機的且協力的ニ其ノ為替取引ヲ律



ルコト  
 ○各地域通貨ト日本円貨（特別円）トハ妥当ナル為替相場（交換比率）ヲ以テ結ビ付クルコト

(三)

本邦ノ支払超過ノ調整策  
 各地域ニ於ケル巨額ノ軍事費支払、軍需資材、食糧等ノ調達開費用  
 資金、資等ニ依リ本邦ノ圈内各地域ニ對スル支払超過ハ莫ニ巨  
 額ニ達スベク將來ノ増大傾向ハ不可避ナルベシ  
 之ノ支払超過ヲ決済センガ為メ  
 (イ) 金ノ現送（イマ・マ・ク・ク含ム）  
 (ロ) 必要ナル計画以上單ニ調整ノ為ノミヲ以テスル物資ノ輸出  
 ハ本邦ノ負担ヲ益々加重スルヲ以テ絶対ニ不可ナリ。採リ得ベキ方策  
 左ノ如シ（一部実施中）

(A) 金融上ノ方策

- (イ) 各地域ニ於ケル物資、労力ノ原価ノ適切ノ公正化（インフレ防止）
- (ロ) 各地域通貨ノ日本円ニ對スル為替換算率ノ適切ノ公正化（割高修正）
- (ハ) 本邦企業並ニ資本進出ニ依ル交易外受取勘定ノ増加
- (ニ) 各地域ノ円資金保措策（イ）各地中央銀行ノ発行準備（ロ）為替決済用資
- (ホ) 金（本邦債券ヘノ投資等）

(B) 財政上ノ方策  
 各地域戰費應能分担ノ問題トシテ次頁ニ（四）述ブ  
 根本概念トシテハ支払超過國タル本邦ガ金融ノ中心タルベキナリ。  
 （既往概念ト正及對）ニグレディットレニ関シ述ブ



<四>

戰費分担ノ問題

(A) 戰費分担ノ理念

大東亞共榮圈ノ確立維持發展ナル一元普遍的共同目的ニ對スル各地

(B) 戰前南方甲地域政策

各地其ノ規模態様ヲ莫ニスレト一應本國財政ヨリ獨立シ居リ支出ニ於テハ國防費ノ占ムル割合極メテ大ナル外一般行政費モ大部分ハ人件費(特ニ恩給費)立テリニシテ收入ニ於テハ從米英資本及華僑ノ勢力下ニアリシ關係上租稅其他官業收入一時敷減予想セラル、モ敵産及華僑敵金ニ依ル負擔ヲ考慮セバ相当部分ノ負擔力アリト云ヒ得ヘシ。(附表(三)参照)

(C) 本年度戰費分担ノ概要

臨時軍事費特別會計ノ財源トシテ「三十三億」ヲ南方開發金庫等ヨリ借入ル、コトニ依リ実行ス  
北支及中南支ニ於テハ朝鮮銀行北京支店及正金銀行及儲備銀行ヨリ取銀券及儲備券ノ借入實施(技術的ニハ預ケ合勘定)ニ依リ南方甲地域ニ於テハ南癸券ノ發行増加ナル形ニ於テ借入ヲ實施ス

(以下口述)



附表(一) 昭和十八年度本邦對各地域收支計畫一覽表

單位百萬円括弧內八昨年度実績

各地域	對滿洲	北支	蒙疆	中支	南支	佛印	泰	南方甲地	合計
受取									
(1)交易	(1,109)	(365)	(1)	(199)	(38)	(109)	(70)	(120)	(2,013)
	845	182	-	100	25	68	63	166	1,439
(2)交易外	(1,390)	(418)	(11)	(231)	(63)	(2)	(15)	(104)	(2,236)
	1,496	439	13	249	78	2	15	132	(2,424)
計	(2,499)	(783)	(13)	(431)	(102)	(111)	(85)	(224)	(4,249)
支拂	2,341	621	13	349	103	70	78	288	3,863
(1)交易	(516)	(222)	(-)	(156)	(12)	(257)	(187)	(243)	(1,594)
	710	789	-	346	48	141	141	344	2,426
(2)交易外	(2,863)	(681)	(5)	(653)	(116)	(125)	(48)	(13)	(4,505)
	2,349	452	52	139	107	135	98	32	2,364
計	(3,379)	(904)	(5)	(809)	(128)	(382)	(235)	(257)	(6,099)
	3,059	1,241	52	485	155	276	146	376	5,790
差引	(880)	(419)	(7)	(438)	(425)	(420)	(449)	(432)	(4,850)
△印支 △印支 △印支 △印支	△718	△620	△39	△136	△52	△206	△68	△88	△1,927



附表 = 昭和十八年度本邦並 = 各地域綜合收支計畫表 單位百円△印ハ支払超過ヲ示ス

	對 本邦	" 滿洲	" 北支	" 蒙疆	" 中支	" 南支	" 佛印	" 泰	" 南方甲地	合計
本邦		△718	△620	△39	△136	△52	△206	△68	△88	△1927
滿洲	718		△194	△12	0	△1	△2	△5		504
北支	620	194		24	△229	△5	△4	△13		587
蒙疆	39	12	△24		17					44
中支	136	0	229	△17		69	△5	△1	0	411
南支	52	1	5		△69		5	1	0	△5
佛印	206	2	4		5	△5		0	△8	204
泰	68	5	13		1	△1	0		11	97
南方甲地	88				0	0	8	△11		85
計	1927	△504	△587	△44	△411	5	△204	△97	△85	0

手入



附表(三)

南方諸地域戦前才出入一覽表

括弧内ハ百分比

	單位	才入	才出	邦貨換算額		内國防費	公債費	恩給年金
				才入	才出			
本邦	百万円			2,211 (100)	2,657 (100)			
爪哇	百万ピアストル	134.6	134.6	107.6 (.13)	107.6 (.12)			
暹羅	百万バート	137.9	137.9	222.7 (.27)	222.7 (.26)			
ビルマ	百万ルピー	174.2	178.5	226.5 (.28)	232 (.27)	37.8	16.2	17.9
英領マレー	百万海峽幣	134.5	160.0	269.0 (.33)	320 (.37)	7.6	3.6	10.4
英領ボルネオ	同上	9.4	7.0	18.8 (.2)	14.0 (.1)	—	—	—
蘭印	百万盾	804.4	872.4	1,850.1 (.225)	2,006.5 (.232)	376.6	2.1	29.8
比島	百万ペソ	92.6	122.6	194.4 (.24)	270 (.31)	19.9		

備考  
 ① 合計年度ハ日本 暹羅 爪哇 比島ハ1941年度、ビルマハ1940年度、英領マレー及英領ボルネオハ1939年度ニ據ル  
 ② 本表ハ半戦年度「プロポーター・レート」ニヨル  
 百分比計 35.2 32.8 南方甲ノミ 31.2 32.7



附表四 (参考)

大東亞共榮圈内通貨事情一覽表

地 域	貨幣單位	100 = 對スル 交換 比率 (日 本 円)	發 券 機 関	18年 6月 発行高 單位百万	備 考	
滿 北 蒙 中	洲 支 疆 支	円	¥ 100	滿洲中央銀行	1.800	最近一年間膨張 <sup>高</sup> 700
		〃	¥ 100	中國聯合準備銀行	1.949	" 1000 百万円
		〃	¥ 100	蒙 疆 銀 行	169 (但 6/21)	" 87
		元	¥ 18	中央儲備銀行	9.122 (6/27)	" 8000 (南支金)
南	支	軍票円	¥ 100	帝 國 政府	流通高 63	新規發行+回收=削減
		元	¥ 18	中央儲備銀行	中支、項参照	(全石香港幣禁止=半上)
		軍票円	¥ 100	帝 國 政府	流通高 106	(香港及海南島=ハ新規 發行ヲモ他地域ハ 回收一考)
仏 泰 南 方 甲 地	印	ロピアトル	¥ 97.60	印度支那銀行	585 百万ロピアトル	非公表=就中一部 推定ラ旨
		バート	¥ 100	泰中央銀行(及政府)	476 百万バート	"
		海狹布	¥ 100	(在未通貨) 海峽植民 地通貨委員會 (軍票) 帝口政府 (南發券) 南方開發金庫	3月末 204 百万幣	< 以下数字軍機密 >
" 117 "	"					
(1) マライ及北ボルネオ	海狹布	¥ 100	(在未通貨) 海峽植民 地通貨委員會 (軍票) 帝口政府 (南發券) 南方開發金庫	6月末 98 "		
				" 117 "		"
(10) ジャワ及 スマトラ	ギルター	¥ 100	(在未通貨) 政府及爪哇銀行 (軍票) 帝口政府 (南發券) 南方開發金庫	3月末 425 百万盾	18/4/31 軍票 發行停止 南發券發行但し 形式紙質算	
				" 65 "		"
				6月末 24 "		

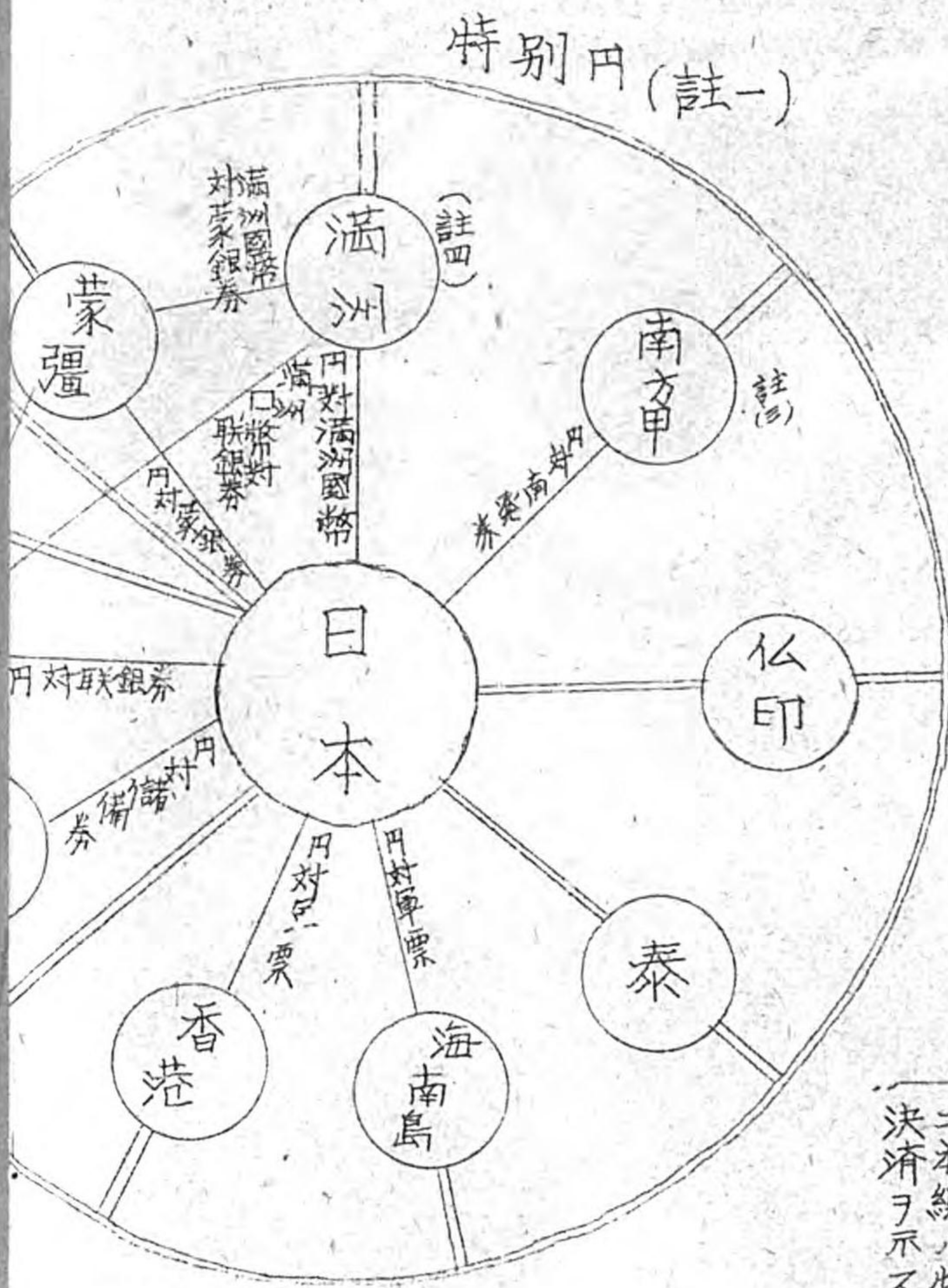


		(南発券)南方開発金庫		6月末 90	17/4/1ヨリ軍票 発行停止 南発券発行但し 形式紙質等 全く同一
(四) ジャマツ 及 スマトラ	ギルター	¥ 100	(在来通貨) 政府及爪哇銀行 (軍票) 帝口政府 (南発券) 南方開発金庫	3月末 425 百万箇 " 65 " 6月末 24 "	
(五) 比 島	ペソ	¥ 100	(在来通貨) 政府 比島銀行、比島吐銀行 (軍票) 帝口政府 (南発券) 南方開発金庫	5月末 170 百万箇 6月末 90 "	
(六) ゼルマ	ルビ	¥ 100	(在来通貨) 政府及印度 準備銀行 (軍票) 帝口政府 (南発券) 南方開発金庫	3月末 152 百万箇 " 198 " 6月末 109 "	



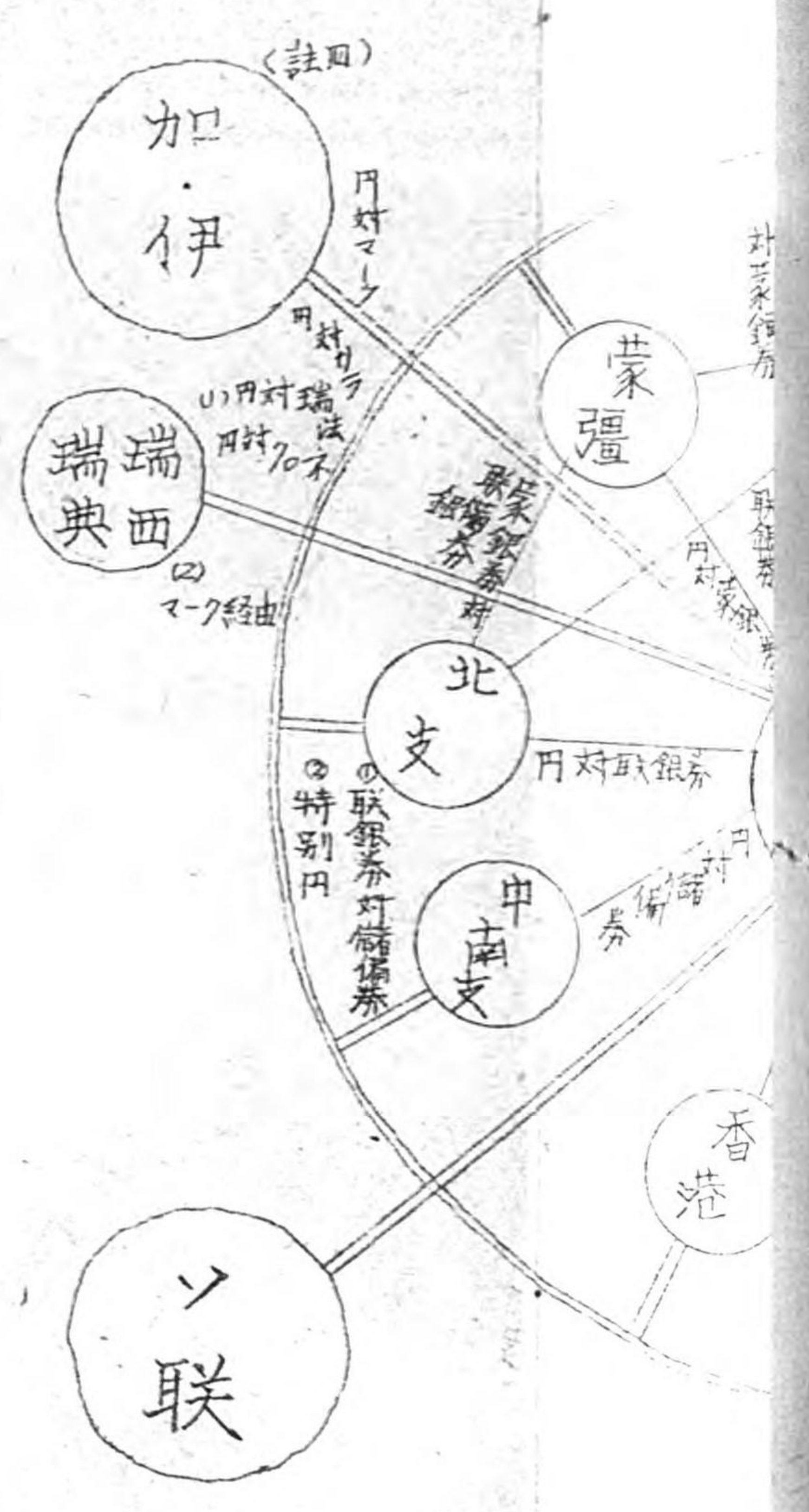
(別圖)

大東亞共榮圈ニ於ケル決済方式略圖（一八七・一〇現在）



〔二本線ハ特別円  
決済ヲ示ス〕





註一、特別円環ニ連繫セル地域間ノ決済ハ特別円ニ依ル  
 (右表中ニ本線ヲ以テ示ス)但シ直線ヲ以テ連繫セル地域間ハ該地域通貨間ノ直接決済ニ依ル

註二、日本対大東亞共榮圏内各地域間ノ為替ハ日本円表示ナリ

註三、南方甲地域ニ於テハ

(1) 交易ハ臨軍會計ノ買取輸出入ニ依リ一般的為替決済ハ行ハレズ

(2) 交易外ニ於テハ对本邦ハ円対南支券ノ直接決済ニ依リ对本邦外ハ為替決済ノ認メラル、場合ハ特別円決済ニ依ル

(3) 甲地域間ノ相互ノ少額ノ交易等ニ伴フ決済ハ被在各地通貨建ノ為替ニ依リ現地通貨間直接決済ス

註四、滿獨協定介ハ滿洲國幣対馬克ノ直接決済ナリ。



(二) 大東亜ニ於ケル物資交流ノ現状ト今後ノ展望

(特ニ日本ヲ中心トシタル觀察)

城村 研 宏 生

1 貿易ノ現状

日本ヲ中心トスル大東亜ノ物資交流ノ現状ハ之ヲ戦前ノ日本貿易ノ状態ト對比シテ觀察スル時極メテ明確ニ把握シ得ツ。由リテ先ツ支那事變開始ノ前年タル昭和十一年度ヲ採リ、日本ノ相手國別貿易額及ビ主要輸出入品ヲ一圖ニ集約スレバ、第一表ニ示シタルコト表ニヨリテ明カナル如ク、日本ノ貿易額ノ構成ニ於テ、亞細亞ノ諸國ノ輸出入合計ハ略々五〇%ヲ占メ、内、主要貿易相手國ハ滿洲、關東洲、支那及ビ英印ニシテ、日本ハ東亜ノ諸國ヨリ原料ヲ輸入シ、夫ニ加工シタル商品(主トシテ綿織物、雜貨類)ヲ輸出セリ。亞細亞以外ノ諸國トノ貿易ニ於テハ米洲第一位ニシテ輸入ニ於テ二九%、輸出ニ於テ一九%ヲ占メタリ。

米洲中特ニ重要ナル貿易相手國ハアメリカ、合衆國ニシテ、日本ハ夫ヨリ棉花、磁油、鐵等ヲ輸入シ、其對價トシテ生絲、植物油、雜品等ヲ輸出セリ。

大東亜戦争ノ開始ト共ニ米洲、歐洲、阿弗利加、太平洋ニ對スル



貿易ハ寸断セラレ、東亜諸國ニ於テモ南方圏トノ貿易ハ作戦遂行中、一時中絶セリ。  
 支ノ反シ滿関支間ノ貿易ハ躍進シ、昭和十一年度ノ貿易額中滿関支ノソレハ輸出ニ於テ七〇%ヲ占メタリ。其ノ現状ヲ圖示スレバ、  
 第一表トナル。  
 大東亜戦争ニ基ク四本貿易額ノ変遷ヲ知ルタメニ、昭和十五、十六、十七、三ヶ年ノ國別輸出入表ヲ第一表ニラ觀察セン。

(1)

(a)

輸出額  
 昭和十五年年度ノ全輸出額三十六億五千六百萬圓ナリシニ、十六年度ニ於テハ、  
 四九%ニ激減セリ。又昨十七年度ニ於テハ、  
 三三%ニ、

(b)

亜細亞洲ノ全輸出額モ十五年度ヲ基準トスレバ、十六年度ハ六%ノ十七年度ハ七%トナリタリ。  
 地域ニシテ、直接ノ作戦対象タリシ香港、馬來、海峽植民地、緬甸、比律賓、英領ボルネオ、蘭印ハ、輸出額當然ニ激減シ、戦前ノ十五年度ニ於テ二億三千三百萬圓、誇クシ、印度ハ、輸出額戦争ノ開始ト共ニ全ク杜絶シ、



昨十七年度ノ全輸出額ハ僅カニ一圓トナリタリ。  
之ニ反シ佛印ノ輸出額ハ十五年度ノ三百萬圓ヨリ十七  
年度ニハ一億四千四百萬圓ハト四十八倍ニ躍進シ又泰ノ  
輸出額モ四千九百萬圓ヨリ一億六千六百萬圓ハト一・三倍  
ニ増加セリ。

(c) 改洲ノ輸出額モ十五年度ハ一億八千萬圓ナリシガ、十六  
年十七年度ニハ對獨伊輸出ノミトナリ、ソノ額四千萬  
圓名ニ著減セリ。

(d) 米洲ノ輸出モ十五年度ニハ総額七億五千萬圓ヲ超エ、日本  
全輸出額ノニ〇%ヲ超エル狀況ナリシガ、大東西戦争ノ  
開始ト共ニ全ク杜絶セリ。

(e) 阿弗利加、大洋洲ノ輸出モ十七年度ニハ全ク杜絶ノ現狀  
ニテリ。

(2) (a) 輸入額  
昭和十五年年度ノ全輸入額ハ三十四億五千三百萬圓ニ  
上リシガ、東西ノ情勢ガ急ラ告ケルヤ、十六年度ニ於テ入  
四%ニ減ジ、十七年度ニ於テハ殆ド年分ニ激減セリ。



(b)

サレド亜細亞洲ヨリノ輸入額ハ、僅カ下ラ増加ノ傾向ヲ辿リ、  
 持ニ滿洲國ヨリノ物資輸入ハ、一、四倍ニ、支那ヨリノソレハ  
 二倍ニ増加セリ。  
 臣細臣ニ於ケル爾余ノ諸國ハ概ネ作戦対象トナリシ爲  
 輸入ハ殆ド杜絶状態トナリ、英印ヨリノ輸入ハ十五年度ノ一  
 億七千七百円ヨリ、十七年度ノ二億萬圓ヘト激減シタリ。  
 之ニ反シ佛印ヨリノ輸入額ハ二、三倍ニ、又泰國ヨリノソレハ三倍  
 以上ニ躍進セリ。

(c)

歐洲ヨリノ輸入モ十五年度ニハ一億九千円ヲ超ニシガ、十  
 七年度ニハ殆ド獨逸ヨリノ輸入ノミトナリ、四千円程度  
 ニ激減セリ。

(d)

米洲ヨリノ輸入額ハ十五年度ニハ総額十五億三千円ヲ超ニ  
 日本總輸入額ノ四四%ヲ占メタリシモ、昨十七年度ニ於テハ  
 千五百萬圓ニ激減シタリ。

(e)

阿弗利加及シテ大洋洲ヨリノ輸入モ昨年度ハ完全ニ杜絶セリ。

(3)

貿易 巨

三 〇 =



大東亜戦争ノ勃発ト共ニ貿易ノ上ニ現ハレタル著シキ変調ハ  
 從來輸出超過ノ状態ヲ続ケタル對支貿易ハ輸入超過ニ転ジ  
 タルコトナリ  
 即チ昭和十五年年度ニハ輸出三億四千二百萬円、十六年度  
 ニハ輸出一億九千七百萬円ヲ算シタリシモ、十七年度ニ於テハ一億  
 五千三百萬円ノ輸入超過ニ転ジタリ  
 又對滿貿易モ十五年年度ニハ二億二千萬円ノ輸出ナリシガ、十六  
 年度ニハ一億八千一百萬円ニ、更ニ十七年度ニハ六千三百萬円ニ  
 著減シタリ  
 其他佛印、泰トノ貿易ニモ輸入超過ノ度ヲ強メ、佛印ニ於テハ十五  
 年度輸入超過九千五百萬円ナリシモ、十六年度ニハ一億一千六百萬円ト  
 ナリ、十七年度ニハ八千九百萬円トナレリ  
 泰ニ於テハ十五年年度ハ僅カ四百万円ノ輸入超過ニ過キザリシモ、十  
 六年度ニハ一億一千七百萬円ニ達シ、十七年度モ依然一億円  
 台ノ輸入超過ヲ保持シツナリ  
 コノ状態ニシテ、貿易外收支ニ依リテ相殺サレサル限リ、  
 日本ハ之等ノ諸國ニ對シテ債務國ノ立場ニ立チ、國際收支上苦  
 境ニ之ツキ至ルベシ  
 從ツテ、今後、共米園ノ建設進行ト併行シテ貿易ニ好転セシ  
 ヲル爲ニ萬全ノ策ヲ講セザルハカラス  
 日本ヲ中心トスル昭和十七年度共米園諸地域ノ主要貿易品ノ



数量及金額ハ「第四表」以下「第八表」ニ掲ケタリ

三九二

2

今後ノ見通シ  
大東亜ノ物資交易ハ昨年七月二十三日ノ大東亜建設審議會ニ於  
テ決定セラレタル基本政策ニ基キ大東亜内給付足体制ノ確立ト  
大東亜全域ヲ通スル軍事力ノ増強ヲ因内諸地域ノ開發促進及  
民生ノ安定ヲ因テトシテ運用セラレヌカニ爲シ日本ヲ核トシ  
圈内各地域ニ亘リテ恒久的ニ樹立セラレタル産業建設計画ニ照  
應シテ綜合的ナル交易基本計画ヲ設定シテ交易營団等ノ如  
キ交易機構ヲ通ジテ最高度ノ計画交易實施セララルベシ

勿論現下ノ状況ニ於テハ各地域ノ産業施設中戰禍ニ依リテ破壊セ  
レ未ダ復旧セラルモノ多ク且ツ船腹ノ不足ニ依リテ輸送上ノ多大ノ  
困難ヲ伴フト雖モ産業建設進展シ船腹ノ不足緩和サルニ至レ  
バ交易機關ノ活動開始ト相俟テ共栄圏ノ物資交流ハ漸次改善  
セラレ諸地域ハ物資交易ノ紐帶ニ依リテ有機的ニ結合セラレ  
名實共ニ共栄圏ノ一環トシテ存力ナル國防經濟体制ヲ完成スル  
ニ至ルベシ



大東亞戦争ニ伴フ物資交流ノ停滞ト回復ノ過程ヲ單純明確ニ理解スル爲、日比米間ヲ一例ニトリテ圖示スルハ、第九表ノ如シ

三九二

第一過程

戰前ニ於テハ、日本及比律濱ハ北米合衆國ト物資交流ノ大動脈ヲ以テ連結セラレ、日比間、貿易ハ四米貿易ノ十分ノ一程度ニ過ギズ。日本ハ米國ヨリ棉花、砥油、鐵、機械、自動車、木材、銅、パルプ等ヲ輸入シ、其対價トシテ生絲、植物油、陶磁器、罐頭詰、食料品、綿織物、玩具、絹織物、メリヤス製品等ヲ輸出シタル。比律濱ハ米國ヨリ鉄鋼及山同製品、砥油、自動車、電氣用機械器具、化学薬品及薬材等ヲ輸入シ、其対價トシテ砂糖、椰子油、コブラ、煙草、麻等ヲ輸出セリ。日本ハ比律濱ニ對シテ人絹織物、綿織物、メリヤス類、石灰、鉄製品、硝子、陶磁器、其他雜貨類ヲ供給シ、比律濱ヨリ麻類、木材等輸入ヲ受ケタリ。

第二過程

然ルニ大東亞戦争開始セラレ、日比間ト米ト結ハ物資交流ハ大動脈ハ切斷セラレ、比島作戦中日比間ノ平常的支易モ一時杜絶セリ。

第三過程

其ノ結果日本ニ於テハ生絲其他物資過

七



老ラ来シ 棉花、鉄、機械、自動車、木材等ノ不足ヲ招来シ、他才比律  
 養ニ於テハ、砂糖、椰子油、コブラ、麻等、老血狀態ト、綿織物、鉄  
 鋼及鉄製品、磁油、絹及絹製品、自動車、英、他、雜貨類、貧血狀  
 態ヲ惹起セリ。  
 ココト、必然ニ比島ニ於テハ生活ノ激変ヲ招来シ、原料品滞貨ノ山積  
 ニ伴テ栽培業者ノ必需品不足ハ民心ノ動搖ヲ促ス主要ナル原因ト  
 ナリタリ。

第 四 過 程

トシテ連繫スル為ニシテ、從來兩國カ米國ニ對シテ、連結シアリタル物  
 資交流ノ大動脈ヲ、此間ニ切換ヘ、相互ニソノ老血セル物資ヲ  
 貧血セル部分ニ輸血セラルヘカラス。  
 サレド血液ノ型ノ相違ニ依リテハ、輸血モ不可能ナルコト同様、物資  
 交流關係ニ於テモ、需給ノ品目ヲ異ニスル場合彼此流通不能トナリ。  
 今日本ト比律濱ノ米國ニ對スル從來ノ貿易品ヲ檢討スルニ、日米  
 貿易ノ断絶ニ依リテ日本ニ過剩トナリタル物資ヲ、比島ハ輸出ニ老  
 ツルコトハ不可能ナルト共ニ、比島ノ過剩物資ヲ直々ニ日本ノ産業ニ  
 依リテ消化スルコトモ不可能ナル。  
 茲ニ於テカ兩國ハ産業ノ編成替ヲ断行シ、日本ハ機械工業、自動車  
 工業、化學工業等ヲ興シテ、之等ノ製品ニ對スル比島ノ需要ニ應ジ、比島

入



ハ砂糖 コブラ 煙草、麻、栽培園、一部ヲ棉花 木材等、栽培殖  
 林地ニ転換シテ日本、需要ニ即應セザルベカラス  
 以上ハ一例トシテ日、此間ノ物資交流ノ調整問題ヲ取リゲタルモ同  
 様、関係ハ他ノ総テ共榮園地域ニ就キテ生起スベク、斯クテ大東匪  
 交易ハ産業建設計画ト、密接ナル関聯ノ下ニ計画的ニ後進セシメラレ  
 サルベカラス

共榮園物資交流促進上ノ諸方策ノ主ナルモノ如シ

一、滿関支トノ交易ニ就テハ從來ニ分散的輸出ヲ綜合シ、一之的交易所機  
 関ヲシテ計画的ニ遂行セシムルト共ニ、交易適格業者ヲ総動員シ、  
 以テ我國必要物資獲得ニ集中的努力ヲ拂フベシ

二、泰、佛、印トノ交易ニ就テハ、現在輸出ニ就テ代行輸出制ヲ至申請制  
 當制等ノ方式ヲ採用シアルモ、將來滿関支ト同様ノ交易方式ヲ移行  
 セシムベシ

三、南方占領諸地域トノ交易ニ就テハ、四下軍政下機宜ノ處置ヲ採ラレシムル  
 モ、將來之ヲ一之的交易所機關ノ運営ニ移管スル要アリ

四、圈内各地域相互間ノ交易ニ就テハ、各地域ノ餘剩物資ヲ相互ニ交流  
 セシメラテ國内体制ノ確立ト民生ノ安定ニ資スル如ク誘導シ、敵性國



家一流矢ラ極力阻止スベシ

五 圏外貿易、特ニ対支那交易ニ就キテハ、總テ日本計画ト指導シテ、  
契約ノ取極メ及ビ運送ラ圖ルベシ

六 圏内各地ノ物價ノ高低ヲ平準化スル爲ニ統一原價計算制度ヲ普及徹底  
シ、國內價格輸入價格輸出價格ノ跛行性ヲ修正シテ東亞綜合物  
價体系ヲ整備スベシ

七 大東亞各地相互間ノ決済及ビ圏外交易ノ清算ニ就テハ、原則トシテ圖ニ  
依ル綜合決済方式ヲ確立スルコト  
又圏内各地域ニ於ケル通貨ノ圓ニ對スル換算率ハ圏内物資交流ノ  
促進ヲ圖ルベシ  
又日本ノ指導シテ下ニ各域ニ於テ高度ノ爲替  
管理ヲ実施スベシ

八 大東亞圏各地ノ関稅調査ハ、圏内各地ヨリ我國ニ對スル重要ノ物資ノ  
供給ト、我國ノ各地域ニ對スル開發資材並ニ生活必需品ノ供給ノ圖  
利化ヲ圖ルベシ  
從来ノ多岐ノ関稅關係ヲ整理シテ特  
ニ就テハ保護関稅主義ヲ採用スルコト